

# 腐：0から始めるアニメ最終回 企画アンソロジー

re0kikaku

## はじめに

---

こちらは二次創作作品となります。

腐向け作品となっております。

当然ですが、原作、アニメ、公式一切とは何の関係もないファン・フィクションです。

アニメ最終回を記念した「意味深表紙イラストに合わせて短編小説を書こう！」に参加いただいた作品をまとめさせていただきました。

参加して下さった皆様、読んでくださる皆様、本当にありがとうございます。

# 腐ゼロアニメ最終回企画アンソロジー

## I .Theatre T

## II .鏡の中の四葩に触れて

## III .夜が明ける音

## IV .すくわれる

## V .彼との約束

## VI .再会と、そして

# I .Theatre T



※※※6章ネタバレを含みます※※※

※※※Web世界軸です※※※

全てを憶えている少年と、全てを忘れられた青年。2人は同じ想いを持っていながら、それを口にしたことは少年の劇場が21個目になっても、一度もなかった。

Theatre T

そこそこ広い道をただひたすらに走る。もちろん地に足をつけて自分の足で走っているわけではない。相棒から伝わる僅かな振動を感じながら進行方向を眺める。

走る速度としては車とほとんど変わらないはずなのに、風は自転車に乗っている時より弱い。そんな不思議な感覚にも随分慣れ、この1年でかなり騎乗スキルも上がった自信がある。手に馴染んだ手綱を握り直しながら俺は口を開いた。

「——そういやさ、」

いつも話はどちらかが突然切り出すことで始まる。長い沈黙にらないよう、静かになったらまるでそういう取り決めがあるように話し出す。

「——」

「俺の地元で伝わる神話の中に、英雄譚があるんだよ」

無言で続きを促すのもいつの間にか暗黙の了解のようになってしまった。俺——ナツキ・スバルは、この男と一体いつからこんな親友のような関係になってしまったのだろう。

「その神話、ギリシャ神話って言うんだけど、その神話で英雄オリオンって奴がいて」

相棒のパトラッシュに揺られながら話を続ける。隣の男——ユリウスは俺の隣を青い地竜のシャクナールに揺られながら、話に耳を傾けている。ロズワール邸に寄った後から、ずっと並んで

地竜を走らせている俺達は、最初はズレていた走るリズムも、完璧に合わせてしまっている。話しながら自分とユリウスの波長がだんだん合ってきてしまっていることを自覚し、それを振り払うように続きを話し始めた。

「そいつが『地上で俺が負ける奴はいない！』って声高に主張して調子乗ってたんだけど」

ちらりと横目でユリウスを見た。彼はこちらを見て黙って話を聞いている。僅かな風と振動に揺れる紫色の髪が、沈みかけた日の光を受け少し赤みがかり、その日の光よりも強く美しい輝きを持つ琥珀色の瞳は真っ直ぐに俺を見据え、まるで一枚の絵画のようになっていた。流石顔面偏差値の高い最優様、と言ったところだ。あまり見ていると、俺が抱いている感情が読み取られそうな気がしてそっと視線を前に戻した。

「嫌がらせで派遣されてきたサソりに刺されて、その毒で死んだんだってさ」

俺がこいつに抱いている感情は好意。しかも恋愛感情だ。こいつとあった直後の俺にこのことを話せば正気を疑われる自信がある。それぞれの立場や現状的にも絶対にこの気持ちを知られてはならない。俺は気持ちを隠すためにも少し雑に英雄譚を簡略化し、終わらせた。

「...それだけか？」

「ああ」

「それは本当に英雄譚なのか？ただ調子に乗って足元をすくわれた男の話にしか聞こえなかったが」

こいついつも人の話に一言二言文句つけてくるな...まあ俺が聞かせるのが地元の童話か、蓋を開けると残念な偉人や神話の話ばかりなのも悪かもしれねえけど...

俺は呆れたように軽いため息をして、また話し出した。

「お前は神話に何期待してんだよ...俺の地元で伝わる神話なんて大体こんな感じだぞ？」

横を見ると思いっきり怪訝な顔をしたユリウスがいた。きっとユリウスはこっちの世界に伝わるような心躍る英雄譚を期待していたんだろう。こいつは意外と夢見がちなところがある。そういった意外な一面を見せてくるのは正直勘弁してほしい。どうしようもないクズな自分の抑えが利かなくなってしまう。

現状の、ユリウスにとって最悪な状況を利用しようという考えが頭をよぎってしまう。最低だ。こいつは今、自分の存在を周りから奪われ苦しんでいる。それを利用しようとするなど、考え

てはいけないことだ。次の話題に移って考えを無くそう。そうしよう。

俺とユリウスは、こうして並んで地竜を走らせるようになってから、エミリアたんに見られたら「2人ってやっぱりすごーく仲良しなのね！少し、羨ましくなっちゃうくらい」と言われそうなくらい(もちろん全力で否定するが)話している。——羨ましいとは、言われなくてもいいが...とにかく、そのくらい話してしまっているが、これには理由がある。

俺は沈黙が嫌いだ。静かになると嫌なことや不安なことで頭が埋め尽くされてしまう。それが嫌だ。だからそうならないように話す。話す。話す。俺から地元の童話や神話、ユリウスから英雄譚や魔法、精霊術について。また残念な英雄譚を聞かせてやろうと横を向くと、

「——おい、」

ユリウスがいくつもの感情が入り混じったような微笑みを浮かべて、こちらを眺めていた。やめてほしいと思った直後にこれだ。なんなんだこいつは。嫌がらせか。

「こっち見て笑うな！嫌味か！イケメン爆ぜろ！！」

そう言うと、ユリウスははっとした顔をしてから、いつもの"最優の騎士"の仕草で進行方向に向き直り、

「いつもの事だが、随分と理不尽な罵声を浴びせてくるね。もう少し落ち着くことは出来ないのか？」

「余計なお世話ですー！」

俺はぷいっという効果音がつきそうな勢いで進行方向に向き直った。ユリウスは時々今のような表情で俺を見てくる時がある。一体どんなことを考えているのかは分からない。ただ、俺はあの顔が嫌いだ。意外な一面を知るのもそうだが、この顔を見ても最低な考えが頭をよぎる。

——もしかしたら、ユリウスに想いを伝えて、俺が支えになってやればあの顔をする頻度が減るかもしれない。

でも絶対に伝えてやらない。

もし伝えて、いい返事が返ってきてもユリウスから向けられる感情は愛ではなく依存かもしれない。俺はそれが我慢出来ない。俺はあいつの弱いところを見たくない。あいつはいつまでも"最優の騎士"でいて欲しい。これはどうしても譲れない。これは、俺にとってあいつの支えになることよりも、カタチだけでも両想いになることよりも、大事なことなのだ。

俺がこの思いを伝えるのは、ユリウスやレム、ヨシュア達が元に戻り、ユリウスが宣言通り俺や皆を驚かすような活躍をした"その先"。それまでこの思いは胸のうちにしまい、押しつぶしていないといけない。

「——君はこの話を知っているか？」

ユリウスが話を切り出した。俺は暗黙の了解に従い無言で続きを促す。

ユリウスが口を開き、俺の知らないこの世界の英雄譚や魔法について語る。その話を聞きながら"その先"への道に思いを馳せ——不意に沈みかけている日に気が付いて「今日は星がよく見えそうだ」と、そう思った。

この後、聞いているのかとユリウスに咎められたのは言わずもがなである。

日が沈み、頭上には地元のものとも似ても似つかない星々が輝いている。夕方思った通りだ。明かりが無いに等しいこともあり、とてもよく見える。周りは虫の鳴き声と薪の燃える音しか聞こえない静かな場所。耳をすませれば目の前で木に背中を預けて眠る男の寝息が聞こえるかもしれないくらいには静かだ。

今日は村につかなかったから野宿をしている。俺とユリウスは外、女性陣は竜者の中で睡眠をとることになっている。地元ではありえないことだが、もう何回か野宿を経験しているからか、幾らかは慣れた。目の前で寝ているユリウスと変わりばんこで見張りをするのもかなり慣れたが、いくら夜の眷属の俺でも何もせずにはぼーっとしていると眠くなってしまう。だから俺は夜、あることをすると決めている。

「よし、材料は揃ってるな」

地面に並べた裁縫道具を一瞥し、小声で確認をした。そう、俺はこの時間裁縫をしている。昨日まではメリィ用のぬいぐるみを作成していたが、完成してしまったので、これから新しいぬいぐるみの作成に取り組む。

布の色は白、黄色、紫、肌色、綺麗な銀色——大好きな少女を形作る色だ。

昨日の夜に作成した型紙を押し当て、ハサミを使い切り取っていく。針と糸を使い服の模様を入れ、髪につける花などの小物をさっと仕上げる。布を表が内側になるように重ね、完成した時に縫い目が見えないよう、不格好な形にならないようにと、細心の注意を払いながら縫っていく。

ミシンを一切使わずにこれまでぬいぐるみを何体も完成させてきたので、その作業スピードと完成度はかなり高いものになっている。これはメリィを始めとする女性陣、オットーやガーフィールなどの男性陣、更にはあのラムにまで認められている。

その人形はあっという間に形になり、3頭身にデフォルメされたエミリアが完成した。

完成した人形を顔の前まで持ち上げ、眺める。髪、顔、服、全て満足のいく仕上がりだ。

このエミリア人形を作ったのには理由がある。エミリアたんが可愛くて仕方がないというものもあるが、大部分を占める理由は別にある。それは自分の感情の抑制のためだ。こここのところユリウスが『あの顔』をすることが増え、必然的にユリウスの状況を利用しようとする考えがよぎる頻度も増えてしまっている。でも俺は絶対に"その先"までこの想いを伝えたくない。伝えない。そのために、自分の中の最悪な考えを"その先"まで誤魔化し、ユリウスの『友』でいるために俺はこの人形を作った。

「——う」

その声に思考に沈んでいた意識が現実に戻された。

低く、弱った響き。それは聞き慣れた声のもので、目の前から発せられた音だった。

ユリウスが、魘されている。苦しげに顔を歪めて悪夢に苛まれている。

ユリウスが魘されるのは今回が初めてではない。状況や見聞きしてきたことを考えると、悪夢を見るのも至極当然というものだ。それでも俺は出来るだけこいつの弱いところを見たくない。

俺はエミリア人形を布の上に置き、ユリウスを起こすために近づき、声をかけた。



——赤い髪の友人が、栗色の髪の友人と共にこちらに背を向けて歩いてゆく。声をかけようと口を開いた。なのに音が紡げない。声が出ないことに驚き、喉に手を当てている隙に友人達はどんどん遠くへ行ってしまふ。声の出ない口を開閉しながら手を伸ばした。手を伸ばした先にはいつの間にか剣を捧げた主や、共に戦った亜人達も背を向けて歩いていた。

置いていかないでくれ

振り向いてくれ

私はここにいる

待ってくれ

立ち止まってくれ  
君たちの隣を歩かせてくれ  
どうか、どうかお願いだ

「忘れないでくれ！」

声が、出た。はっとして、俯きかけた顔を上げて更に声を出そうとした。だが、その動作はまるで凍ってしまったように止まってしまった。

顔を上げた先、手を伸ばした先には、先程までこちらに背を向けて歩いていた人々がいる。先程と違うのは、全員の足が止まっていることと、全員がこちらを見ていること。こちらを向いているその顔が全てを語っていた。表情が、全員同じだった。全員がこちらを、

まるで初めて会った人に突然声をかけられたように、怪訝な表情をして見ている。

「——ウス、ユリウス！」

「——ッ！」

最近すっかり聞き慣れてしまった声に呼ばれ、夢の世界から冷水を浴びせられたように急速に意識が浮上する。

目を開けると、目の前にスバルの顔があった。夢を見てしまっていたようだ。スバルは私が起きたのを見て少し安堵したような顔を見ると、すぐに離れた。

「もう交代の時間だぞ」

「そのようだね。起こしてくれたこと、感謝する」

躰させていただろくに、スバルは一切言及しようとしな。それがありがたかった。スバルは先程まで使用していたのであろう裁縫の道具を片付け始めた。ふと布の上に置いてあるぬいぐるみに気がつく。恐らく新作のものなのだろうそれは、人型の人形のようなだった。綺麗な銀色の髪、白と紫を基調とした服。スバルの大好きな少女にとってもよく似ている。

「エミリア様か」

「ん？これか？そうだエミリアさんだ！どうだ可愛いだろう！」

スバルは自信満々にエミリア様の人形を私の目の前に掲げた。そのスバルの顔を見て胸がちくりと傷んだ。その痛みを無視するように人形を見る。

「ほう、よく出来ているな。確かにエミリア様によく似ていて可愛らしい」

「やらないぞ！」

「別に欲しいとは言ってないだろう」

私がそう言うとスバルはエミリア様人形の頭を柔らかい笑みを浮かべながら一撫でし、布の上に置いて再び片付けを再開した。

私は人形を自慢したスバルに複雑な感情を抱きながら、少しだけ喜びに浸っていた。スバルは交代する時に私がまだ起きていなかった場合、1秒後には寝られる、というよう準備して起こしてくる。だが今回の様に私が驚かされていた場合は、やっていた作業を中断して起こしてくれる。

私にはそれがとても嬉しかった。

「——その顔、やめろよ」

「——スバル？」

スバルはぼそりと呟くと、片付け終わった裁縫道具を脇に避け、少し不機嫌そうに空を見上げた。夕方の時も、その前にも何回かスバルに顔を注意されている。最初はいつもの戯言かと思っていたが、スバルが注意してくる時は決まって感情がごちゃまぜになってしまっている時だから、顔に出てしまっているのかもしれない。夕方の時は、沈黙を作るまいとするスバルの行動をありがたく思いながら、心配をかけてしまっている、と申し訳なくなっていた時だった。

スバルは少しの間黙って見上げていたが、何か思い付いたように不意に口を開け、話し出した。

「夕方の時に話した」

「——」

「オリオンの話、あれ覚えてるか？」

「ああ」

スバルの地元に伝わる神話の、残念な英雄譚。裏切られた期待の大きさから、とても印象に残っている。

「あれ、続きがあるんだよ」

「ほう」

残念な英雄譚の続き。オリオンが生まれ変わりでもしてサソリに復讐するのだろうか。それとも、天界で名誉挽回する活躍でもするのだろうか。少し胸を弾ませながら続きを予想する。

「星になったんだ」

「——星？」

予想外の答えだった。星、とは今も見上げれば数え切れないほど瞬いているあの光のことであっているのだろうか。

スバルは怪訝な顔をしている私を一瞥すると、軽くふきだし「そういう顔すると思った」と言い、視線を空へと戻して再び話し始めた。

「そ、星だ。まあ正確には星っていうより星座だな」

「せいざ...とは星と星を繋いで動物や人を描いたものだったか」

せいざについては以前スバルが話していた。スバルの地元に伝わるものらしい。数え切れないほどの星々を繋げるなんて、スバルの地元には想像もつかない発想をする人物がいたのだなと、衝撃を受けた記憶がある。

「そうだ。オリオンは死んだ後星座になったらしい。更に言えばサソリも星座になった。」

「サソリはオリオンを討ったサソリか？死後、自分を殺した相手と同じところにいる、というのは精神的な負担が大きそうだな...」

自分を殺した相手と何年も、何百年も共にいるというのは、死後と言っても恐怖や不安が付きまとうだろう。自分の実力を過信し、大口を叩いただけだというのに随分な仕打ちだ。

「そうは言っても空は広いからな。同じところにいたとしても、逃げることはできる。オリオン座はサソリ座が空に登ると、隠れるように沈んでいくしな」

「そうなのか。ただ、恐怖と隣り合わせだということは変わらないだろう」

「あー...そうなのかな」

スバルは少し考えると、私の方をじっと見つめてきた。

「...なにかな？」

「いんや、なんでも。ただ、自分を殺したやつだからってそんな怖がなくなってもいいんじゃないかなって思っただけ。」

そう言うとスバルはまた星空を見上げ、少し目を細め、何かを思い出すようにしながら続きを話し始めた。

「殺したやつ...サソリだって別に、人を殺すことを喜びにしてるサディスティック野郎って訳じゃないかもしれないだろ。命令されたから殺っただけかもしれないねーじゃねーか」

「さでいすていっくが何か分からないが、たしかにそうかもしれないな」

「ならべつにそんな怖がる必要はないんじゃないかって、俺は経験則から思う」

スバルは人差し指を立ててそう言うと、私が詮索をしようとする前に、いつの間にか用意していた毛布を被ってこちらに背を向けて寝る体勢に入っていた。

今の言い方、今の行動、それはまるで私が――

「お前は余計なこと考えなくていい。せいぜい俺とかみんなを驚かせるような活躍をする方法でも考えとけ」

「そう、だな。君が理解できないことを言うのは、今に始まったことではないしね」

「一言余計なんだよ！もう寝る！おやすみ！」

「ああ。おやすみスバル。――いい夢を」

それ以降スバルは一言も喋らず、少しするときこちない寝息が聞こえてきた。寝付きが悪いと本人が言っていたが、本当に悪いらしい。いつもは寝る姿勢に入ってからしばらくは寝息が聞こえてこない。今はきっと話を切るために「俺は寝ている」というポーズを取っているだけだろう。流石にこれで騙されると思われていては困る。私は少しスバルに近づき、無理やり閉じている瞳の上に手を添えた。

「私が余計なことを考えなくていいなら、君も考えなければいい。ゆっくりおやすみ。スバル」

スバルは数秒間そのまま動かなかったが、その後私の手を避けるように軽く首をふり、それからまた少しすると、穏やかな寝息が聞こえた。抱いている感情は全く異なるモノなのに、こういう時はスバルのことをまるで弟のように感じる。

見てみると、あどけない寝顔をしていた。酷く無防備で、可愛らしい。

スバルに好意を抱いている私にとって、それは強すぎる毒だ。毒であり、スバルが私のことを信頼してくれている証でもある。

だから私は目をそらした。毒に侵されないため、信頼を裏切らないため。

私はスバルが好きだ。私と話していると軽口ばかり出てくる口も、綺麗な筋肉のついた身体も、鋭くつり上がり、時に人を殺しそうになる目つきも、大好きな少女や大切な人々を必死に守ろうとする姿勢も、そしてどんな絶望にも立ち向かい、突破していく強さも、全部好きだ。この思いは怠惰との戦いの時に芽生え、今では誤魔化しきれないほど大きくなってしまっている。

でも私はスバルにこの気持ちを伝える気は毛頭ない。

名前を喰われた直後の私なら伝えようと思っていたかもしれない。だが、私はスバルに最優であれと、弱いところは見せるなと言われてしまった。

それに、伝えたとしても優しい彼は本当の気持ちで答えないだろう。もっと酷い場合は依存心と受け取られてしまうかもしれない。

だから私は想いを伝えない。私にとってこれらの理由は、今大きな精神的支柱を手に入れることよりも、ずっと大切なことなのだ。

この想いを伝えるのは、眠り姫やヨシュア達を目覚めさせ、スバルや皆を驚かせるような活躍をし、スバルに自分のことを、自分はスバルのことをより知り、理解した"その先"だ。

"その先"まで私はスバル『友』でいる。"その先"のため、今はこの気持ちを押し殺し、閉じ込める。

私は再び頭上に広がる星空を見上げる。不規則に広がる星々を眺めながら"その先"への道筋を思い——ふと、ここでは見られないというスバルの地元の星空を見たいなと、そう思った。



全てを憶えている少年、全てを忘れられた青年。2人は同じ想いを持っていながら決してそれを口には出さず、『友』を演じることをやめないで、"その先"に想いを募らせ続けていた。

"その先"までの道のりに、絶望があることくらい、これから行く先のことを考えなくても経験則で分かっていたはずなのに。そしてその絶望を意識しなくてはいけないと、考えなければいけないと心のどこかでは分かっていた。でもそれを無意識に阻み、考えないようにしていた。それともお互いに「彼ならば何があっても大丈夫だ」とでも思っていたのか、はたまたパーティの実力を過信してしまっていたのか。

どちらにしても、向き合わなければいけない絶望を箱の中に閉じ込め、紐で縛り、更には御丁寧にカバーまで被せて、形だけでも遠ざけてしまっていたことは確かだった。

2人で居られる今と、ハッピーエンドになるはずの"その先"のことばかり考え、絶望から目を背け続けた。

その絶望が、紐を解き、箱をこじ開け、カバーでは防げない見えない手をこちらに伸ばしてくることくらい、気付いていたはずなのに。

少年と青年は目を背けることをやめなかった。

それは少年の25個目の劇場が終わっても、変わることは無かった。



待ちに待っていたはずのプレアデス監視塔は、痛いほどの静寂に包まれていた。時折外で風が吹き、外壁の隙間から入ってきた砂が床に落ちる音くらいしか聞こえない。今ここにはスバル、ラム嬢、アナスタシア様、パトラッシュ、ジャイアン、レム嬢を除いた面々が揃っている。それにもかかわらず、誰1人身動き一つしない。エミリア様は祈るように手を握って俯き、メイリィ嬢は不安を押し殺すように口を固く結び、スバルに貰ったぬいぐるみを抱きしめ、ベアトリス様はスバルが生きている証である契約での繋がりを確かめるように胸に手を当てている。

そして私もまた、拳をかたく握り動けないでいた。本当は彼女達の不安を和らげるために何か行動を起こすべきだと頭では分かっている。だが、自分の中で渦巻く不安と恐怖と心配と絶望と無力感をどうすることも出来ず、ただただ立ち尽くしていた。

大丈夫だ。彼なら、彼ならば無事に戻ってくる。

——本当は彼が強くもなんともないただの少年だと知っているだろう

彼は、強い。今まで誰1人成し得なかったことをいくつもこなしてきた。

——それでも彼だって人間だ。しかも優秀な人間だとは言い難い。死ぬ時はきっと驚くほどあっさり、死んでしまう。

彼なら、スバルなら大丈夫だ。

——本当にそう思っているなら、剣を捧げた主のことを思うべきだろう。

彼はいつもどんな絶望にも打ち勝ってきた。

——ずっと自分に言い聞かせても何も変わらないと、わかっているだろう。

彼は大丈夫だという自分と、僅かに残った冷静な自分がぶつかる。どうしてこうなってしまったのだろう。彼を過信し、絶望から目を背けてしまったからだろうか、それとも彼を想ってしまった私への罰なのだろうか。

沈黙が続く中、小さな声と音が沈黙を破った。

「——あ」

小さく、掠れた声。小さな身体がまるで糸の切れたあやつり人形のようにがくと崩れ、その場にへたり込んでしまった。

「ベアトリス様!？」

「ベアトリス!？」

エミリア様と私はすぐにへたり込んでしまったベアトリス様のそばへ行き、しゃがんだ。

「大丈夫ですか?ベアトリス様」

「.....が.....かしら」

「え...？」

ベアトリス様はへたり込んだまま俯いてしまって、表情は見えない。だが、その声は震えていた。私はこの時点で、次に紡がれる言葉を分かっていたはずなのに、いや、ベアトリス様がへたり込んだ時点で分かっていた。ただ、その事実を受け入れたくなかった。気の所為だと、勘違いだと、早とちりだと言って欲しかった。

「スバルが、死んだかしら」

静かに、水が落ちた。否、水ではない。涙だ。ベアトリス様が泣いてしまっている。間違いなく原因は今の内容だというのに、私は受け入れられない。

「うそ...でしょ...そんな...スバルが...」

エミリア様が鈴の音を震わせ、ゆるゆると首をふった。

「嘘じゃ、ないのよ。スバルは、スバルは、死んだ、かしら...！」

ベアトリス様は溢れ出る涙をこらえることも出来ず、深く俯いて弱々しく言葉を紡いだ。私は、どうすればいいのだろう。

「ベア、トリス様、まだスバルが死んだと決定づけるのは早計ではありませんか？まだ彼が生きている可能性だって...」

私がそう言うとベアトリス様は勢いよく顔を上げて、大きな瞳から涙を流しながら、私のことを睨み、叫んだ。

「——っ！ないっ！ないかしら！！ベティーが、ベティーが一番よく分かってるのよ！スバルと

の契約が切れて、消えて...！もう、スバルはどこにもいないかしら...！ベティーを置いて、もう...！」

そしてまたゆっくりと俯き、嗚咽を漏らしながら泣き続けた。エミリア様はその場に崩れ落ち、顔を手で覆って、繰り返しスバルの名を呼びながら泣いている。メイリィ嬢は突然のことでまだ受け入れきれていないのか、ぬいぐるみを落として、元々大きな目をさらに大きく見開き、その目からぼろぼろと涙を流しながら、固まってしまっている。

私はこの時、本当は女性達を支えなければいけなかった。だが、私はそんなことを考える余裕がなかった。

目の前が黒く、否、黒いという表現は相応しくない。無だ。目の前が無で覆われた。地に足が付いていないような、底なしの喪失感、不安、恐怖や絶望に包まれた感覚。視覚も嗅覚も、さらには聴覚までも遠ざかり、目の前の景色も、すぐ側から聞こえる少女達の泣き声も全てが遠く彼方に消えてゆく。

ただただ、スバルが死んだという事実だけが私の中へ入ってくる。スバルと今まで過ごしてきた時間や、"その先"への希望が砕け散り、私は外にも内にも何も残っていないんじゃないかと錯覚するような虚無感。

「スバル」

自分のものではないような、消え入りそうな声が聞こえた。この先の言葉は、もう誰にも届かない。受け取る者はもう、この世界のどこにも居ない。それでも、2度と伝えることの出来なかった言葉を、私は

「私は、君のことが——」

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

\_\_\_\_\_

全てを憶えている少年、全てを忘れられた青年。誰にも届くことのなかった青年の声は無に掻き消され、青年の劇場も程なくして終わりを迎える。

少年はまた別の劇場へ行き、いつか"その先"を掴み取るだろう。それでも、いくつかの劇場の青年の想いは、決して届くことはなく、虚しく消えていく。

その劇場の数々は、まさしく悲劇を演目にしたようなものであった。

## 後書き

今回このように神々の中に紛れ込み、企画に参加させていただいたこと、とても嬉しく思います。勇気出してリプ出してよかった...！とても素敵で意味深なイラストを担当させていただき、私の実力でどこまでこのイラストを生かしきれるかと不安もありましたが、私自身たくさんの事を学べた作品になりました。そしてここまで読んでいただきありがとうございました！

表紙・縁側様

文・まりー様



## II .鏡の中の四葩に触れて



6章までのネタバレがあります。

辺りに広がる錆び付いた臭い。噎せ返りそうなほどのそれに顔を歪ませた。鼻を覆うために左手を持ち上げようとする。そして、ふと、気付いた。私の左腕はもう無かったのだと。準精霊たちが治療を施した腕は、痛みを感じず、未だに失ったという実感がわかなかった。己の油断がこの失態を招いたのだ。突きつけられる現実が重くのし掛かる。足枷がつけられたように重い足を引きずりながら、ユリウスは静まり返ったプリステラの町を歩いていった。

崩れ落ちた建物に、あちこちに広がる死体。この町がプリステラだと言って、いったい誰が信じられるだろうか。あの美しい町並みは一夜にして見るも無惨な姿に変わり果てた。辺りを見渡しても、呼び掛けても生存者は見つからない。ユリウスは一度、苦しげに息を吐くと崩壊した建物の隅に腰かけた。準精霊たちが不安そうにユリウスの周りを舞う。大量の血を失い、体温が下がり続けるユリウスの身を案じたのか、イアが赤い光を放った。赤く灯ったそれはユリウスの身を優しく包む。冷えきった体が温められ、ユリウスは「ありがとう」と礼を述べた。

「イア。昔、君に見てもらった少年のことを覚えているだろうか」

イアはユリウスの身をぐるりと一周すると肯定する。ユリウスはそうか、と微笑むと空を仰いだ。日が落ちる寸前の赤い空。彼をこの剣で切り裂いた、あの日と同じように見える。

「彼がもし、生きていたらプリステラは変わっていただろうか」

イアはユリウスの肩にとん、と止まった。まるでユリウスを慰めてくれているかのようだ。ユリウスはイアに触れると、懐かしむかのように目を細めた。もう1年も経つというのに、ユリウスはナツキ・スバルのことを忘れたことはなかった。一人の少女のために必死に戦い、惜しくも亡くなった彼のことを。

フェリスの判断は正しかったし、ユリウスも彼の命を絶ったことを後悔してない。だが、もしも、という可能性を未だに捨てきれていなかった。

「もし、スバルが生きていたら、私はスバルと友人になれただろうか」

なぜ、そんな思考に囚われるのかわからない。体力を消耗しきってしまったためか、正常な判断ができなかった。イアが不安げにユリウスの周りを浮遊する。

「だが、私にはその資格はなかったな。私は彼の命を奪ったのだから。その罪は許されることはない」

願わくは、もう一度彼に会いたい。そんな愚かな願いが消えないのは、私が死へと向かっている

からだろうか。瞼を開けるのが段々と辛く、重く感じてくる。とくり、とくりとゆっくりとした感覚で睡魔が襲ってきた。準精霊たちがユリウスの周りを漂う中、ユリウスはそっとその瞳を閉じたのだった。

微睡みの中、ゆっくりと意識が浮上する。先程まで真まで冷えきったはずの体が温かい。イアが再び魔法をかけてくれたのだろうかと思ったが、どうやら違うようだ。ユリウスの体を包むのは温かい布のようなもの。瞼を開き確認すると、どうやらベッドで横になっているようだ。ユリウスは上体を起こし、部屋を確認した。部屋の内装は極々普通の民宿のようだ。どうやら、プリステラでも崩壊せず残った民宿があったらしい。隣に設置されたベッドには誰かが寝ているようで、穏やかな寝息が聞こえてくる。ユリウスと同じ負傷者だろうか。誰がユリウスをここまで運んだのかわからないが、感謝しなくてはならない。あのまま力尽きた可能性もあるのだから。ふと、準精霊たちがユリウスを囲む。ユリウスは笑みを浮かべると、彼女達へと手を伸ばした。だがそれを避けるように準精霊たちが離れてしまう。

「皆、どうした？」

だが、ユリウスが問いかけても彼女たちは返事をしてくれない。まるで聞こえていないかのようだ。そして、ユリウスはその違和感によりやく気付く。そう彼女達との契約が絶たれているのだ。

「っ...!？」

あの場で眠りについた後、契約が絶たれたのだろうか。精霊との契約を絶つことなど並大抵のことではできない。よほどの力の持つ術者でなければ不可能だ。誰かが故意に契約を絶ったのだろうか。だが、それにしても不自然だ。ユリウスを弱体化させるためならばその時点で傷を負っているはず。だが、体を確認してもそれらしき傷はひとつもなく、むしろあの場で負ったすべての傷が癒えている。フェリスが治療したとも考えられるが...

まずは状況を確認しなくてはならない。ユリウスは立ち上がると隣で眠る人物に近づこうとする。だが、その足はピタリ止まった。そして、恐る恐る右手を伸ばし左腕に触れる。そこには確かに繋がれた自身の腕があった。なぜ、ここに腕がある。切り落とされた自身の腕をユリウスは確かに確認したはずだ。いくら、青の称号を持つフェリスでも腕を生やすことなどできない。なぜ、なぜ。

ユリウスが固まったまま動けずにいると「うーん」という声と共にベッドで寝ていた人物が寝返りを打った。その人物を確認するとユリウスの瞳はさらに大きく開かれる。

「スバル...？」

そう、そこにはユリウスが1年前にこの手で殺したはずのナツキ・スバルが眠っていたのだ。ユリウスは呆然と立ち尽くしたままスバルを見つめる。漆黒の髪に引き締まった体躯。髪は下ろされているものの、この人物は確かにナツキ・スバルだった。

「スバル...」

戸惑いながらも彼の頬に触れる。その肌は熱を帯び温かい。生きている。あの冷たく無惨な姿になったナツキ・スバルが生きている。ユリウスは確かめるかのように何度も彼の頬に触れた。すると、スバルが眉をひそめ再び「うーん」と唸る。そして、その瞳がゆっくりと開かれた。その夜空のように黒い瞳はユリウスをまっすぐに捉えてくれる。

「...お前何やってんの？」

スバルは目付きの悪いその瞳を更に細めながらユリウスに疑問を投げ掛けたのだった。

「君は本当にナツキ・スバルなんだな？」

「何、お前。頭でも打ったのか。俺がそれ以外の何に見えるんだよ」

スバルは眠たげに目を擦りながらユリウスを軽く睨む。眠りを妨げられ少し機嫌が悪いようだ。ユリウスが何度見ても彼はナツキ・スバルだった。ユリウスの記憶よりは少し体が鍛え上げられ体格が異なっているようだが、その声もユリウスに対する態度もナツキ・スバル本人のものに相違ない。

「ここは、どこだ？」

「はあ...？ここはプレアデス監視塔に向かう途中にあった町で...名前は...忘れたけど」

「プレアデス監視塔...？」

「おいおい、まさか、それすらわからないとか言うんじゃないだろうな？」

「プレアデス監視塔のことは知識がある。だが、その目的は把握していない」

ユリウスが素直に吐露すると、スバルはその目を大きく開いた。そして、勢い良くユリウスに掴みかかる。その慌てた様子にユリウスは目を瞬いた。

「お前、まさか自分の名が奪われたのも忘れたのか？」

「名を奪われる？なんのことだ」

「ユリウス、お前、記憶喪失なのか」

スバルは呆然としたようにユリウスを見つめる。記憶喪失。スバルはそう結論付けたようだが、ユリウスは納得いかない。確かにユリウスとスバルには記憶の齟齬があるようだが、状況が違いすぎる。ユリウスが持つ記憶ではスバルは既に亡くなっているのだから。

しかし、どう説明すべきなのか。ユリウス自身も把握していない状況を果たしてスバルに伝えることができるのか。話したところでスバルは信じることはないだろう。ユリウスは悩んだあげく、嘘を吐いた。

「少し、記憶が欠落している」

「原因は？」

「わからない。だが、呪術などによるものではなさそうだ」

「ストレスか...？」

「すと...？」

「いや、何でもない」

スバルはそれ以上はなにも言わなかった。そして、静かに状況を説明をしてくれる。

スバルの話によると、ユリウスは今『暴食』によって『名』を失い、それを解決する糸口としてスバルと共に、プレアデス監視塔に向かっているという。

ひどく精巧に作られた夢だとユリウスはそう感想を残す。死んだはずのナツキ・スバルが生きており、彼と共に行動をしているなど夢以外ありえない。

まるで、本当にあるかのように作られた夢。物も、人にも触れることができる。彼にもう一度会いたかった願ったユリウスに、神が最後の贈り物をしてくれたのかもしれない。

「今日のユリウス。なんだか変ね」

朝食を摂った後、食器を片付けているとエミリアがユリウスを覗き込んでくる。ユリウスの記憶にあるエミリアとは異なり彼女は柔らかな笑みを浮かべていた。

「変...でしょうか？」

ユリウスは戸惑ったように笑みを返した。スバルにはこの事は口外するなど言われている。ユリウスもそれに関しては同意していた。原因が判明しない以上、あまり多くの人間に話すべきではない。

「うん、変よ。スバルのこと苦しそうに見ているんだもの。スバルの態度もおかしいし。もしかしてスバルと喧嘩した？」

やはり、彼女は聡い女性だ。よく、スバルのことを見ている。ユリウスは苦笑し、軽く肩を竦めた。エミリアに悟られないように。

「少しだけ。ですが、エミリア様が気にされることはありません」

「なら、良いんだけど。少しね、二人の距離が遠くなったように見えたの。昨日まではすごく近かったのに」

「...少し、口論してしまいました」

「そうなの？」

「ええ。ですが、明日には元に戻りますから」

エミリアは少し納得いかないようだったが「早く仲直りしてね」と笑みを向けてくれた。明日、本当に戻るかどうかは、わからない。だが、ユリウスはこの夢は長くは続かないと理解していた。それほどまでに、この夢は甘く苦く、不釣り合いなものだったからだ。

その後、スバルの勧めでベアトリスには状況を説明し、調べてもらったが、やはり呪術の類いはかけられていないようだった。部屋に戻るとスバルがユリウスに声をかけてくる。その顔は酷く焦っているようで、不安げだった。

「なあ、お前どこまで覚えているんだ？」

「『怠惰』の討伐に参加したところまでは」

「そんなに...前なのか。もしかして、プリステラの一件も覚えていないのか？」

プリステラ。ユリウスの脳裏にあの酷い惨状がはっきりと浮かぶ。魔女教の襲撃を受けたプリステラはほぼ壊滅状態だった。ユリウスが知る限り生存者は殆どいない。スバルの言葉から察するに、この夢の世界でも魔女教の襲撃があったのだろう。

「部分的だが覚えているよ。魔女教の襲撃を受けたところまでは」

「...そうか」

スバルは少し顔を歪めると、それっきり何も話さなくなる。まるで、自分に責任を感じているかのようなその態度。なぜ、彼はここまで私のことを案じてくれているのだろうか。

先程のエミリアの言葉が蘇る。『近かった距離が遠くなった』。それはつまり、この世界の私と彼は友人同士だったことを示しているのだろう。

顎を引くスバルとユリウスの間には人1人分の距離が空いている。まるで、ユリウスとスバルの間に壁があるかのようなだった。決して越えられない大きな壁。私では彼と友人になることはできなかったのだと嫌でもわかる。

「少し尋ねたいことがある」

「...？何だよ」

「もし...私が君を殺したことがあると言ったら君はどうする？」

ユリウスの突拍子もないその質問にスバルは困惑したように眉をひそめた。ユリウスは黙ったままスバルの答えを待つ。

「...お前は俺を殺したいのか？」

「いや、そのようなことはない」

「じゃあ、その質問の意図はなんだ」

「.....」

ユリウスは答えられずに沈黙した。どのように説明すれば良いのかわからない。なぜ、話してしまったのだろうか。ユリウスに後悔の念がのし掛かる。スバルは何を思ったのか、苦しげに顔を歪ませ顎を引いた。ユリウスが思わずスバルへ手を伸ばすと、それを反射的に払わる。ぱしっという乾いた音が辺りに響いた。スバルは慌てたように「ごめん」と謝罪したが顔を上げることはなかった。

「すまない、そんな表情をさせるつもりはなかった。私は、ただ...」

しかし、その後の言葉は続かない。ユリウスは口からは言葉は発せられずに、ただ空気が抜けていく。もう一度会いたいと願っていたスバルが目の前に居るのにも関わらず、ユリウスは何も伝えられていなかった。彼がユリウスの知るスバルでは無いからだろうか。この見えない壁がもどかしかった。

ユリウスは一度大きく深呼吸をするともう一度スバルに向き直る。これは、夢だ。おそらく、ユリウスが最後に見れるスバルの夢。ならば伝えられなかったこの想いを彼に話すべきだ。それが、ただの自己満足に過ぎなかったとしても。

「スバル。あの時何を話したかったんだ？」

「...あの時？」

「...『怠惰』との戦闘の最中に君が言ったことだ」

スバルはわからないと困惑したようにユリウスを見つめる。ああ、やはり、彼は私の知るスバル

と別の人生を歩んでいたのだろう。あの時、彼の口から聞いたかった言葉はもう知ることはできない。それでもユリウスは続ける。同じナツキ・スバルである彼に、ただ、知って欲しかった。

「私は、期待していたんだ。君を友人になれるかもしれないと」

「...俺とお前は友人だろ」

「ああ、そうだったね。『私』と君は友人だった。だが、今の私と君はそうではないだろう？」

「.....」

「君は私と一定の距離を保とうとしている。それは、私も同じだ。君と対峙するのは久しくてね。どう接したらいいかわからないんだ」

スバルの瞳が少しずつ探るものに変化していく。ユリウスの意図を探ろうとしているのだろうか。ようやくスバルはユリウスを真っ直ぐに見つめた。その瞳には確かにユリウスの姿を写していた。目の前に存在していた壁がゆっくりと消えていく。

「私は、君を好いていた。英雄としての可能性を秘める君を。その成長を支え見届けたいと願っていた」

「急に、何言い出すんだよ。そんなこと今まで一度も」

「やはり、『私』は何も伝えていなかったのだね」

「...なあ、お前。本当に『ユリウス』なのか？」

スバルは戸惑いながらも聞いてくる。なんと答えるべきなのだろうか。私が『ユリウス』であることは確かだ。しかし、私は。

「君の知る『ユリウス』ではないかもしれない」

「どういう意味だよ」

「私は、君がペテルギウスに体を乗っ取られたときに、止めを刺したんだ。この剣で君の首を裂き、殺した」

「...っ!？」

スバルは息を飲みその瞳を大きく開く。信じられないと驚愕しているようだった。当たり前だ。自分を殺したと言われたら誰しも同じような反応を示すだろう。

「お前、本当に」

「信じてくれるのか。このような戯れ言を」

「嘘なのか」

「嘘ではないよ。これは曲げることのできない真実だ。許されることのない、私の罪」

スバルは苦しげにユリウスを見つめる。その手は震え何度も呼吸を繰り返していた。まるで、必死に自分を落ち着かせるように。

「お前が、自分を責めることは無いんだ。あれは、仕方がなかったんだ」

「まるで、知っているかのように話すんだね」

「……」

「私は一度躊躇ってしまったんだ。君を殺すのを。君が力を振り絞って私に託そうとしてくれたのにも関わらず。それは私の弱さだった」

「でも、止めを刺したのはお前だろう？お前は叶えてくれたんだ。ナツキ・スバルの頼みを」

「…だが」

「許してくれ、ユリウス」

続けようとした言葉をスバルが遮った。なぜ、君が許しを請う必要がある。まるで、自分に非があるかのようなスバルの態度にユリウスは困惑した。

「君は、何を言っている…？」

「…ナツキ・スバルはユリウス・ユークリウスを恨んでなければ憎んでもいない。むしろ感謝しているんだ。だから、許してくれ。俺もお前自身も」

「…それは、できない。これは君を救うことができなかった私の罪だ。一生背負わなくてはならない」

「俺が許しているのに？」

「君は、私の知るスバルではない」

スバルは悲しげに微笑んだ。否定するわけでも肯定するわけでもなく。彼はユリウスが殺した「ナツキ・スバル」ではない。何故なら、彼は生きているからだ。それを私は理解しているはずなのに、目の前の彼が「ナツキ・スバル」にしか見えなくなる。

「ナツキ・スバルはお前のその辛気臭い顔なんて見たくねえよ」

「……」

「死者の願いは時々思い出して笑ってもらうことだ。それ以上のことなんて望んでいない。だから、笑ってくれ、ユリウス」

彼は卑怯だ。ユリウスが背負うべき罪を苦しみを全て溶かそうとしてしまう。ユリウスは顎を引き、押し寄せる熱情を堪えた。彼は笑みをとったのだ。真逆のそれを見せてはならない。何度か深呼吸を繰り返し、ユリウスはゆっくりと顔を上げると、スバルに笑みを見せた。その顔は酷く強ばっており、スバルは苦笑する。

「酷い顔。お前、笑い方すら忘れたのかよ」

スバルはユリウスの頬に手を当てた。そして、手本とばかりに笑みを浮かべる。初めて見るスバルの穏やかな笑みだった。ユリウスはそれにつられもう一度、笑みを浮かべると、スバルはその瞳を大きく見開いた。どうやら、今度は上手く笑えたらしい。ユリウスはそっとスバルの頬へと手を伸ばし、触れる直前でそこ動きを止める。そして、何かを必死に堪えるような表情でスバルに尋ねたのだった。

「君に、触れても良いだろうか」

スバルは笑みを深め、軽く顎を引く。ユリウスは安堵したように笑うと、壊れ物に触れるようにスバルの頬へ触れた。温かな体温がユリウスの手から伝わってくる。確かめるように頬を擦るとスバルがくすぐったそうに首を傾けた。

「君を、抱き締めたい」

「...俺の胸、安くは無いんだけどな。まあ、今日だけ特別だ」

スバルは受け止めるように両手を広げた。ユリウスはスバルの背に手を回すと、強く抱き締める。全身に感じるスバルの温もりがユリウスに伝わってくる。胸の鼓動は確かに強く打ち続けて、彼が活着ているのだと実感できた。温かい。心地よい。こんなにも穏やかな気持ちになれたのはいつが最後だっただろうか。

「...ごめん」

ぽつりと、今にも消えそうな声でスバルが呟いた。何に対する謝罪なのかユリウスにはわからない。「どうした、スバル？」と問いかけたが彼は何も言わなかった。ユリウスはスバルの身を離そうとしたがスバルがそれを拒む。ユリウスの背に爪を立て、しがみつくように抱きついてきた。その姿はまるで子供のようだ。見ると彼の肩が震えている。ユリウスはスバルの背を何度も擦った。スバルは私が知る以上に、多くの物を背負っているのかもしれない。

「君はよくやった。だから自分を責める必要などない。君が、自分を許せないのならば私が許そう」

スバルの腕の力が強くなる。ユリウスの胸がスバルの涙で濡れていく。ユリウスは泣きじゃくるスバルの頭をそっと抱き寄せた。

「ありがとう、スバル。私はもう一度君に会えて幸せだった」

夢の終わりは唐突に訪れた。抱き締めていたはずのスバルが泡のように弾ける。確かに存在していたはずの温もりは、まるで最初から無かったかのように消えてしまった。

瞼を開けると、そこは小さな古い民家だった。これでもかと負傷者が詰め込められたその部屋は泥臭く血の臭いが充満している。ああ、戻ってきたのだとユリウス理解した。そうだった。ここが私が居るべき場所だった。軽くなった左腕をユリウスは静かに見つめた。

「ユリウス、気分はどう？」

「フェリス。ずいぶん楽になったよ。君が私を運んでくれたのか？」

フェリスは何故か訝しげにユリウスを見つめる。自分は何か間違ったことを聞いただけだろうか。ユリウスの記憶が正しければ、外の瓦礫の近くで眠りについたはず。

「...ユリウスは自分でここに来たよ。今にも死にそうぐらい衰弱してたからフェリちゃんが治療してあげたの。覚えてないの？」

「...記憶にない」

「今日のユリウスおかしいよ。やっぱり、まだ記憶喪失が治ってないのかな」

「記憶喪失...？」

ユリウスの脳裏に一つの可能性が生まれる。私が『居ない』間にこの体は意志を持ち動いていた。それは、もしかしたら、あの世界の私がこの宿っていたのではないかと。

「ユリウスったら、スバルきゅんとか、エミリア様とか懐かしい名前ばかり出して必死に探そうとするんだもん。彼らは生きているって断言して。もう1年も前に亡くなっているのにね」

「...そうだったか。すまなかったなフェリス」

「今のユリウスが本当のユリウスかには？フェリちゃんそれなら安心できるんだけど」

「ああ、安心するといい。混乱させてすまなかった」

フェリスは安堵したように笑みを見せると「フェリちゃん少し休憩ー」と言い、ユリウスの隣りに腰かける。

「フェリちゃんもね、少し考えちゃった。スバルきゅんが居たらプリステラはどうなってたんだろうって。もしかしたらって考えてしまったの」

「.....」

「考えても仕方がないんだけどね。死者が蘇ることなんてあるはずないんだから」

「この世界にナツキ・スバルは居ない。だが、別の世界で存在しているのならば、それで構わない。私はそう思うがね」

フェリスは驚いたようにユリウスを見つめた。らしくないと目で訴えているようだ。ユリウスはそれに苦笑する。確かに数時間前の私ならばそんな発言などしなかったに違いない。

「その別世界のスバルきゅんにでも会ってきたの？」

「ああ、ほんの僅かな時間だったが」

「...フェリちゃん冗談で言ったんだけど」

「信じるか、信じないかは君次第だ」

「今日のユリウスと話しているとフェリちゃん疲れちゃうー」

フェリスは「うーん」と大きく延びると立ち上がり、周りを見渡した。そして、覚悟を決めたように目を細める。そう、まだプリステラの一件は収束していないのだ。ユリウスもフェリスに続き立ち上がると外へ向かおうと歩き出す。

「大丈夫なの？まだ、傷が」

「問題ないよ。ここで立ち止まっては彼に叱咤されてしまうからね」

プリステラは未だに夜が明けない。ユリウスは覚悟を決めたように目を細めるとその扉を開いたのだった。

「スバル...？」

抱き締めていたユリウスの体がピクリと動き、体を離す。ユリウスはスバルに焦点を当てると驚いたように目を見開く。ユリウスが『戻ってきた』のだとスバルは理解した。良かったと喜ぶべきなのに、何故だろうか。ぽっかりと心に穴が開いてしまったかのように満たされない。

「私は、なぜ、ここに」

「覚えてないのか。お前急に倒れて俺に寄りかかってきたんだ」

「...しかし、私の記憶では」

「お前、最近、寝不足だったんだろ。それで急に倒れたんじゃないの？」

「.....」

ユリウスが睡眠不足というのは事実のはずだ。スバルは夜中に一人部屋を出ていくユリウスを何度も見てきている。ユリウスは暫く沈黙していたが、ふと気がついたようにスバルへと視線を向ける。

「スバル、泣いていたのか？」

ユリウスはスバルの頬へと手を伸ばした。だが、スバルはその手をやんわりと避ける。なんなく触れられなくなかったのだ。

「気にするな、大したのことじゃない」

「だが...」

「良いんだ、ユリウス。終わったことだ」

ユリウスは何か言いたそうにスバルを見つめたが、暫くしてその手を下ろした。そして、もう一度スバルへ笑みを浮かべる。

「スバル、君が無事で良かった」

「...？お前何言ってるんだよ」

「...夢を見ていたんだ。君がいない世界の夢を」

「.....」

「そこは崩壊したプリステラで、私は左腕を無くしていた。君は1年も前に亡くなっていて、エミリア様も居なかった。まるで一つの未来の可能性を示しているようで...」

「ただの、夢だろ？」

「そうだったな。これは、夢だった」

彼は、ユリウスであるはずなのに『ユリウス』ではない。もうきっとあの『ユリウス』にはもう二度と会うことはできないのだろう。スバルは自身の手を見つめる。出会わなければ、こんなにも苦しむことはなかったのだろうか。

「なあ、もし...」

その夢が現実にあったとしたら。俺が何度も死んでいると知ったら。お前は\_\_

「...どうした、スバル？」

「いや、なんでもない。忘れてくれ」

窓から入り込む光は高く上り詰めている。まだ、この1日は始まったばかりだった。



### III.夜が明ける音



## 夜が明ける音

空は決して形を留めない。

どんなに美しい空もそのうち崩れてしまい、がらりと変わってしまう。そして、二度と同じ空は見られない。

だからこそ、その一瞬が愛おしいほどに綺麗だと感じるのだ。

王都を抜け、建物にさえぎられた空の色を見たとき、思わず息をのんだ。

影さえも赤く染めるような夕焼け。画用紙にあかい絵の具を落とした時のように、深く、美しく、淡く、優しい炎。

東からは夜を滲ませるように紫が近付いている。

今すぐ誰かとこの時間を過ごしたい \_\_\_\_\_ 覚えたのはそんな衝動。

もうすぐ燃えるような夕日など無かったかのように、綻びのない完璧な闇が来てしまう。その前に、感動を共有したい。

頭に浮かんだのが、愛する少女達ではなく、いけ好かない美丈夫の横顔だったのは偶然だ。

そう、偶然だけれど、一番に思い浮かんだのだから、とスバルは体を引き返した。

決してあいつと会いたいなんて思ったわけじゃない、と自分に言い聞かせながら。

「驚いたよ、君が散歩の誘いとは」

「別にお前と歩きたかったわけじゃないけどな。呼べる距離で空いてそうなやつを他に思いつかなかっただけだ」

何が驚いた、だ。呼び出したとき、自分の顔を見ても一度も表情を崩さなかったくせに、と顔を顰めるスバル。

「.....ああ、なるほど」

君は、とユリウスが微笑んだ。

少し時間が経ってしまった為か、空を見上げて先程までの美しさは消えてしまっている。それでも、目を引くような赤い空はやはり綺麗に感じられた。

「この景色を見せたかったのか」

連れ出した理由は何も話していない。それなのにどうして分かったのだろう。

全てわかっているとでもいうように微笑むユリウス。こういうところもスバルにとっては気に入らない点の一つだ。

「まあ、間違っちゃねーよ」

実際、間違っていないどころか大正解なのだが。

「きっと、君が呼びに来る前はもっと美しかったんだろう。見れて良かったと思う、ありがとう、スバル」

「.....どーいたしまして」

ユリウスの真っすぐな琥珀の瞳を見るとくすぐったいような気分になる。

こんな風にただありがとう、と言える正直なところでさえ、見ているとどうしてだか心が痛い。そんなに俺は、ユリウスのこと嫌いなのだろうか。

スバルは最近、自分が抱いている感情を説明できない、そんな曖昧さを持って余っていた。赤が夜と溶け合うように消えていく。

どのくらい話していただろう。

すっかり空は暗くなり星が瞬いている。

数分前までは留まることなく話したいことが溢れ、テンポの速い会話が続いていたのだが、徐々に口数が少なくなり押し黙ってしまったユリウスによって、二人の間に静寂が漂い始めた。

居心地の悪さに立ち上がろうとしたスバルを制止するかのようにつけられる声。

「スバル、少し聞いてほしいことがあるのだが」

スバルも声色に含まれた真剣さに、息を吸って座りなおす。

「なんだよ」

「私は君を、好ましく思っている。恋愛対象として、だ」

朝になる幻を見た。空が一度に明るくなり光が差し込む、そんな色を見た気がした。

ユリウスが吐いた言葉は、スバルが彼に対して抱いた感情に、まるでパズルのようにかちりと当てはまる。

そうだ、たったの二文字。嫌いとは正反対のその言葉だ。

ユリウスが言葉を続けているのが分かったが、今のスバルにそれを聞く余裕などない。

「スバル？」

立ち上がろうとした瞬間、足がもつれ転びそうになった。とっさにバランスを取ろうと重心をずらす。

浮遊感を感じ、状況を確認すれば、間近には整った顔。どうやら、よろめいたところを支えてくれたらしい。

「わ、わりい」

「スバル。私はまだ君の返事を聞いていない」

もがこうが到底スバルの力では鍛えられた男の腕の中から逃げ出すことなど出来ないのだ。

観念して目を合わせる。

「たぶ、ん。俺も好き、なんだと思う。恐らく」

言葉にして、確信に変わった。ナツキ・スバルはユリウスが好きだ。

「いやに曖昧だな」

くは、と笑う琥珀の視線から逃れようとして顔を逸らした。

「私は、スバルが好きだ」

頭上に降るまっすぐな告白に赤くなる顔。

「……あー俺も好きですよ！！たぶん！これでいいかよ！」

どうしても多分か、とユリウスが腕の力を緩める。

飛びのけるように離れるスバル。

ユリウスの苦笑につられ、思わず吹き出した。  
夜明けの光が二人をぼんやりと照らし出す。

表紙・なかこ様

文・なな様



## IV.すくわれる



この小説には五章までのネタバレを含んでいます。未読の際には注意して閲覧ください。

---

彼は無力だった。一人では何も出来ない、非力な少年。

だが彼は無力故、頼る事を学んだ。一人では決して越えられなかった壁を、彼は彼自身の手によって破壊した。それは単に、彼の人柄が周りの心を動かしたが故の功績である。

無力だった少年は挫折を繰り返しながら、“英雄”へと生まれ変わった。

---

気を抜けば吸い込まれそうな、まるで深海のような藍色をした小瓶の蓋を開ける。キュポン、という心地良い音をたてて開けられた小瓶の中で、無色透明な液体が揺れ動き波紋を描いた。無臭のそれを一気に煽り、味を感じる前に嚥下する。そもそもそれには味すら無いのだが、それを飲んでいると知覚したくはなかった。

最初は極微量を週に1度服用する程度で済んでいたが、最近では小瓶いっぱい満たされた位の量を、1日に複数回飲まなければ耐え切れなくなってきている。

「イタイなあ...。」

ふと、綺麗な橙色に染まった空を見上げる。夕日の煌めきによって照らされた漂う雲は、その位置を忙しく変えていく。

そっと頬に触れた。閉じた瞼に映る景色に息を呑む。

---

「ベア子、次はどこへ行きたい？」

「スバルが行きたい所に行けばいいかしら。ベティーはスバルの付き添いななのよ。」

今は昼下がりに。大体の人が昼食を済ませたような時間に、スバルとベアトリスはとても賑やかな街の商店街へ足を運んでいた。

「いやあ、昨日の内に仕事終わらせて良かったわ。まさか休みが取れるなんてな。」

「最近仕事詰めで大変だったスバルの為なのよ。後であの二人に感謝するかしら。」

実のところ、スバルには今日も仕事があったのだ。それを、ラムやフレデリカの計らいによって

一日暇を貰うことが出来、今ベアトリスと共に街へ遊びに来ている。

レムの手を借りたくても借りられず、一人抜けるだけでも忙しくなる事が分かっているのに、気分転換にでも、と休暇を与えてくれた彼女等には本当に感謝しかない。

その休暇の意味が他にあるという事は、スバルの耳には入っていない。

「そうだな、なんかお土産でも買って帰ろうか...あ。ベア子！俺ちょっと行きたい所が...ベア子？」

ベアトリスと手を繋ぎながら街中を歩くスバル。傍から見れば幼い女の子の手を引く目付きの悪い危険な青年と映っているだろうが、数ヶ月前の功績を知っている者は多い。おかげで憲兵を呼ばれる事無く自由に散策出来ている。

ベアトリスの言葉に頷き、なにかお礼をと考えた時丁度思い出した用事。それは、ぬいぐるみに使う布を買うというものだった。

今屋敷の地下にはメイリィという、ペトラと同じ位の年をした女の子が幽閉されている。幽閉と言えば聞こえは悪いが実際の所匿っているのが現状だ。

魔獣の角を折らずに従わせられるその能力をそのまま放置していれば完全に二の舞である。だが、幼い女の子を一人陽の光の当たらない場所にいさせては可哀想で。打開策として、スバルはぬいぐるみを作ることにしたのだ。

たまにはあるが、暇を使ってコツコツと作り上げたもふもふのぬいぐるみはメイリィにとっても好評で、街へ買い物に来る時は毎回材料を買いに行っていた。

今回もその例に漏れず布を買おうとしたのだが、ベアトリスはスバルの声に反応しなかった。何事かと顔を動かすと、ベアトリスは立ち止まり、心ここにあらずといった表情でどこかを見ていた。目線の先を見ると、そこはとても古そうな店で、看板には恐らく口文字であろうもので何かが書かれている。

文字の隣に描いてある絵を頼りに、ベアトリスに声を掛けた。

「見てくるか？本、最近読んでないんだろ？」

瞬間、ベアトリスの身体が大袈裟な程に揺れ動いた。

「俺今からいつもの手芸店行きたいんだけど、ベア子はここで本読んでてくれよ。あんまり時間無いからそんなに読んでられねえだろうけど。」

一日休暇を貰ったとはいえ、移動する距離はなかなか長く、街にいられる時間は少ない。滞在時間はざっと見積もって三時間。

先程ベアトリスは自身を付き添いだと言ったが、折角街、元い屋敷の外へ来たからには絶対何か一つは思い出らしいものを作ってあげたいというのがスバルの想いだ。お気に入りの本

でも見つけれれば。

「わ、分かったかしら。スバルが買いに行ってる間、ベティーはこの店で時間を潰しているのよ。」

「そうしてくれ。なんかあったら助け求むだろうけど。」

「そろそろ、一人で歩いても安心出来るようにしてほしいところね。」

「これでも頑張ってるんだよ。じゃあまたな。」

明らかにそわそわしているベアトリスに苦笑を漏らしながら別れを告げる。遅くもなく、かといって早くもないように時間を調節しながら用事を済ませなければならない。

いつも鼻屑にしている手芸用品店なる商屋へ赴く。そこへは路地裏を通った方が近道なので、移動時間短縮のため人通りの少ない道を選ぶ。入り組んだ道を何度か曲がり、さあ後少しで着く、という所でスバルの視界の先に鮮やかな紫色の髪を持つ人が居た。紫と言っても少し赤みがかっていて、藤色と形容するよりはオーキッドと表現した方が的確だろう。

そんな髪色をした人などあまり見た事がなく、すぐ誰なのかが分かってしまった。向こうもそれは同じようで、気障ったらしい笑みを向けながらその人はスバルに話し掛けた。

「久しいな、スバル。」

たった一言声を掛けられただけ。なのに膨れ上がるよく分からない思い。それを皮肉に変換するのはいつもの事だ。

「...よお、ユリウス。なんでこんな薄暗い路地裏なんかにいるんだよ。もしかして、最優の騎士ともあろう御方がサボりかましてるんじゃないですかねえ？」

「残念ながら今日は休暇を与えられている。君こそ、このような場でラインハルトに救われた事を忘れているのだろうか。」

「ああもう俺が悪かったからその話は止めろ！あの時の話は結構惨めになる...。」

「それはいつもの事ではないのか？」

「うるせえよ！」

戴冠式が行われてから早数ヶ月。今までに起きた怒涛の出来事の連続が、まるで嘘かのように平和な日々が続いていた。

自他共にエミリアの騎士と認められた今、その名に少しでも恥じぬ力を身につけようと、スバルは今まで出来なかった技を習得し始めている。

パークールのおかげで瞬発力や反射神経、全体的な筋肉の向上が見受けられ、その辺にいるチンピラ位だったら倒せるようになった。多分。

「あー、出会って数分で悪いんだけど、俺は制限時間があるミッション達成しなきゃなんねえからもう行くわ。じゃあな。」

ユリウスとの話を終え、目的地へ向かおうと後ろを振り向いた瞬間腕を掴まれる。訝しげな顔をしてしまうのは、しょうがない事だと思う。

「...どうした？」

「...少し、顔色が悪く見えたのでね。何かあったのかと。」

「はぁ？そんな事で呼び止めたのかよ。お前も暇だな。」

顔色が悪いのは自覚が無かったが、もしかしたら未だ目覚めぬレムの事が原因なのかもしれない。勿論気にしていないと言えば嘘になるが、周りに余計な心配だけはさせたくない為どうかしようとは思う。

ユリウスは、自身の放った心配という感情を一刀両断されたためか少し眉間に皺を寄せていた。

「...今、君は私に対して失言でもしてしまったと思っているのだろうな。」

心臓が大袈裟な程に跳ねる。内心を見透かされ、得体の知れない何かを感じた。

「何故私が君の身を案じているのか分かるか？」

そんなの分かる筈が無い。精々同情からくるものだろう。

「分からないと、そんな顔をしているな。」

当たり前だ。人の気持ちの答えを他人が持っている訳が無い。思わず顔を顰める。それを咎めるように真剣な表情を見せた。

訳が分からない。何故そんなにもスバルの一挙一動に反応するのだろうか。何故一つ一つの表情

の中に哀情を含んでいるのだろうか。何故――

「君が好きだからだ。」

――そんな告白を口に出すのだろうか。

「独りでは脆弱なのに、一人の想い人を救う為英雄にまで成るその胸懷を、私は好んでいる。」

「...だから好きだったか？そんなの、死線と一緒に潜り抜けた時の気持ちを持ち込んでるだけだろ。吊り橋効果ってのは案外酷いもんだぜ？一回冷静に考えてみるよ。」

「つりばしこうか、が何かは分からないが、少なくとも私は自身の気持ちを軽んじている訳ではない。」

「じゃあどうして好きになるんだ。そんな要素、俺には一つも無いだろ。」

初対面の時の印象は一言で言えば最悪。あの時の発言を軽はずみな物だと思える今だからこそ、互いに間違っただけの想いは抱いていなかったと分かるものの、あまりにも酷い陳述だったと思う。一時は共闘もしたが、それでも最初の印象が全て払拭出来る訳では無い。なのに、目の前に居る最優の男は四拍子欠けた少年の事を好きだと言う。

「君の自身に対する自己評価が低い事などとうの昔に知っているし、そこが愛らしく、また救い上げたいと思っている。君が何か秘密を有し、それをひた隠しにしているのは薄々気付いている。自陣営にも伝えてないようだから、それほど重要なものなのだろう。だからこそ私は、君を救いたい。君の足りない所を埋めさせてほしい。君が無条件に頼れる居場所になりたい。理由はそれだけでは不十分か？」

美丈夫から出た言葉に溢れ出そうになる涙を必死に堪える。彼の口説こそ、今スバルが一番欲していたものだった。

頼りたい。誰かに頼りたい。

その想いは死に戻りをする程増すばかりで。死に戻りの事を打ち明けてしまえば、その周回は死を免れる事が無い。死に戻りのルールに則った明かし方しか出来ず、明かす度に降り積もる隔絶の感触に身を苛まれていた。

人に頼んでいる。頼れている。なのに消えない孤独。

聖域の件で仲間が増え、不安材料も無くなった今でも足りないもの。

「...そんな事簡単に言うなよ、最優の騎士サマ。」

「君だからこそだよ。」

滑り落ちた皮肉を綺麗に拾い上げ、優しく微笑み返される。流れるような仕草で伸ばされた手のひらはスバルの頬を包み込み、そこで初めて自分が泣いている事に気付いた。

一回り程大きい手に自身の手を重ね、頬に擦り寄せる。

「埋めれるもんなら埋めてみるよ。俺の隣と膝はもう埋まってるぜ。」

「ならば背中を埋めよう、スバル。君の負担が減るように。」

また一人大切な人が増えたって言ったら、どう思うだろうな。

いつの間にか背中に腕が回され、引き寄せられる。その勢いのまま頭をユリウスの肩に押し付け、気が済むまで泣いていた。

---

「...んで、この後お前はどうするんだよ。」

「そうだな...君に会うまでは暇を持て余していたのでね。特にすることもなかったな。」

「だったら尚更何であんな路地裏にいたんだよ...。」

あの後随分と涙を零し、目が少し腫れ赤みがかかるまで時間を過ごした。

その間何も言わず抱き締めていたユリウスの肩の辺りは若干湿っており、それを見る度スバルは羞恥に襲われている。

「この後何か予定は？」

「いや、俺も特にねえな。あとは夕暮れ位に帰るだけ。」

「そうか。なら、私の屋敷へ来ないか？」

「はいはいそーですか、じゃあま...は？」

「君を招待したい。生憎、与えられた休みが長くてね。時間は沢山ある。」

どうせ気障な答えしか返ってこないと適当にあしらおうとして失敗した。  
付き合っただけで恋人の家にお泊まりって早過ぎねえか？

「確かに、些か早すぎる気もしなくはないが、もう待つのは飽いてしまっている。」

慌て過ぎて声に出ていたようだった。最優らしからぬ性急さだったが、それほどまでに一緒に居たいのだと思えば満更でもなく、その提案をのむ事にする。

「ちょっと待ってろ。今からベア子に伝える。」

「おや、ベアトリス様と一緒にだったのか。それは悪い事をした。」

どうせそうは思っていないくせに。その言葉は胸の中に仕舞い込んだ。

「ベアトリス。」

「はいなのよ...って、コイツは何なのかしら。」

一言少女の名を呼べば、頼れる相棒は直ぐに駆け付けてくれた。が、スバルの隣に居る美丈夫に怪訝な表情をする。誘精の加護がよっぽど苦手なのだろう。内心は好んでると見るが。

「今からコイツん家行くから、エミリア達によろしく言っといてくんねえか？」

察しの良い相棒はそれだけで何があったのか分かったみたいで、すぐ首を縦に振った。  
そして、スバルの方を向いていた顔をユリウスの方へ向けた。

「...ベティーのスバルに何かしたら許さないかしら。」

「肝に銘じておきます。」

「それだけなのよ。」

二言話ただけでふいっと目を逸らし、会話は終わったと行動で示す。未だ抜けきれていない

角張った言葉の中にはスバルへの憂いが混ざっていて、思わず苦笑した。

「じゃあベティーは行くかしら。帰って来たらあの娘達が何をしでかすか楽しみにしてるのよ。」

「怖いこと言うんじゃないよ...よろしくな。」

別れを告げ、ベアトリスは転移魔法を使い戻って行った。次のマナ補給までは魔法は使えないだろう。

「という訳で、さっさと行くぞ。」

そう言い、手を差し出すとユリウスは驚愕の表情に染まったが、スバルの行動を理解したのかすぐに笑みを浮かべ、着けていた手袋を外し手を取った。そのまま指を絡められ、俗に言う“恋人繋ぎ”の形になる。直に伝わる相手の体温に不覚にもドキドキしてしまう。誘われたユリウスはしれっとした顔だが、誘ったスバルの顔は熟したリングのように赤く、これではどちらが誘ったのか分からない。

カッコ悪さからつい出てしまう皮肉に、ユリウスはクスクスと笑うだけだった。

時は変わり別邸の中。今は応接間とも言える広い空間で一息ついていた。

ついさっきとはいえ、仮にも恋人になった二人。今この状況は正に“彼氏の家遊びに来ている彼女”なのではないのか。不覚にも心臓が大きく音を響かせる。もしかしたら相手にこの鼓動が聞こえているのではないのだろうか。気恥ずかしさから話し始める。

「な、なあ。庭園見に行ってもいいか？」

高鳴る鼓動を隠すように発する声。我ながら女々しい気もするがこればかりはしょうがない。恋愛などこの世界に来てから現実味を帯びてきたのだから。

そんなスバルの内心を知ってか知らずか、

「勿論だとも。本邸ほどの規模ではないが、庭師が丹念に手入れを行っているおかげで、どこにも負けない位美しく咲き誇っている。」

と、得意満面な顔でユリウスは語った。つまりは煩い心音を知られていない。内心ほっとしながら案内してほしいと提案、いいだろうと了承され植物を見に行く事になった。

道中色々な事を話したが、口に出すのは憚られた。言うまでもなくそれは今まで互いに爛れた関係を持っていたからなどではなく、ただ単に口に出すには面映いという感情があったからだが。それはともかく、庭園に辿り着いた時のあの感動は凄まじかった。色とりどりの世界がそこにあり、嫌悪感を抱くことなく感想を言い表せる程だった。目が痛くなる位強烈な色を持った植物は一つもなく、いくらでも観ていられる。

「凄いな、これ。一個一個色が違う。」

ロズワール邸にも庭園はあったが、あれはどちらかと言えば緑が主体だった。様々な色を加えるところまで素晴らしい場所になるのか。色々な場所をきょろきょろと見渡す。ふと、水面に漂う多彩な色の花を見つけた。

「これは睡蓮という花だ。うちの庭師が特に気に入っている種らしくて、力の入れ具合も他とは全く違う。」

一つ一つの花が淡色を纏い、これだけでも芸術だと呼べる程美しい光景だった。

「綺麗...だな。」

その景色は圧巻で、言葉が出ない。これほどまでに感動を覚えたのはいつ以来だ。元の世界でも同じものはあるが、ここまで風光明媚な色彩は表現し得ないだろう。

結局、庭園で夕食までの時間を費やしてしまい、呼びに来た使用人の言葉に二人揃って目を見張ることになる。

---

寝室の中でスバルは寝台の上に、それも隅に腰掛け頬を紅く染めながらユリウスの到着を待っていた。ユリウスと同じ寝室をとらせたのは勿論ユリウス本人だ。

先程夕食も風呂も済ませ、後は寝るだけという状態。それでも寝ずに律儀に恋人が帰ってくるのを待っているのは、スバルの恋愛経験が全くと言っていいほど無いという事だけが原因ではないと信じたい。

あれこれ思考を巡らせているうちに、ドアが音をたてて開く。

「...そんな顔をしながら私を待っていてくれたのか。」

「そ、そんな顔ってどんな顔だよ。ってか、別にお前の事なんか待ってねえし！」

我ながらに酷い言い訳だが、ユリウスは苦笑を漏らしただけだった。

寝台までの距離を数本で縮め、スバルの目の前に辿り着く。心臓は相変わらず身体の中で反響し、心奥の想いを自重させる材料となる。

頬に手を添えられ、思わずギュッと目を瞑る。何も見えないものの、僅かな風がユリウスの動きを知らせてくれる。今更開けることが出来ず、開けるタイミングを窺っていると唇に柔らかい感触が伝わる。それは一瞬の事で、目を開いた時にはユリウスの顔は少し離れた所にあった。

何をされたのか。それが分からないほどスバルは子供ではない。赤かった顔が更に火照るのを感じる。

「明日は早いのだろう。もう寝た方が良い。」

そう言い、スバルから身を離し寝台へ乗り上げる。手慣れてやがるコイツ…。皮肉が喉までせり上がったが、ユリウスに隣の空いている場所をぼんぼん、と叩かれては何も言えなくなった。

のそのそとこの場所まで行き即座に寝転がる。笑われた気配がしたが気にしない。ユリウスも寝転がり二人は自然と向かい合った。この時スバルはしまった、と内心思っていた。寝転がる際横向きに、それもユリウスの方を向いて寝そべってしまったのだ。おかげで顔が近い。

だが、そんな気持ちも溜まった眠気を前に掻き消えてしまう。今日は街を歩き庭園を見て回っただけとはいえ、昨日一昨日の疲れが無意識の内に溜まっていたのだろう。瞳を閉じては開くを繰り返すスバルに、ユリウスはまた苦笑を漏らす。

明日から以前と同様、暫く会う事は困難だろう。しかし、不安も寂寥も感じなかった。今心にあるのは愛しさだけ。故に、面差しにも愛情が含まれている。

風呂上がりのせいで額を覆っていた髪を上げ、あどけなさを見せる顔に一つ、愛を落とす。

「おやすみ、スバル。」

穏やかな響きを纏った声を最期に、スバルの意識は闇の底へ沈んでいった。

-----

夢を見た。辺りは全て漆黒に染まっており、自分の身体は何処にも見当たらない。視界は自由に動かせるが黒檀の景色が変わることが無かった。しかし、時折金属で擦り合うような甲高く耳障りな音は聞こえる。だがそれも直ぐに止んだ。

ふと、視界の端にほんのりと光が映った。その輝きを道標に目線を移す。そこには手にも見える淡い黒をした靄が漂っていた。

同じ黒にも色々あるんだな。

場違いにもそんな感想を抱いている間に霧は自身に近付いてきて、霧は頬の辺りを覆った。身体があればの話だが。

霧は撫でるような仕草をし、誰かが、何処からか音を発した。

「.....って」

「ッッ!？」

目覚めが訪れた。悪夢を見たような感覚がスバルを襲い、恐怖心により瞳を開ける。ユリウスの顔がすこし、ほんの少しではあるが寝る前に見た距離よりも離れて見えた。と、そう知覚した瞬間に視界の中のユリウスが急激に上昇していった。

「スバル!？」

ユリウスの声が聞こえ、気が付けば彼の腕の中にスバルの身体があった。何が起きたと混乱するスバルに、ユリウスは心配そうな顔と声色を向け言った。

「顔色が更に酷くなっている。やはり一度休むべきだ。直ぐに竜者を手配しよう。少し待っていてくれ。」

ユリウスは近くにあった休憩用の長椅子にスバルを壊れ物を扱うような丁寧さで、優しく慎重に座らせ、細い路地から煌めく光の眩しい道の方へ走り去った。人気のない路地にはもちろん誰一人とて周りにはおらず、呆然と座り込むスバルだけがこの空間に存在している。ユリウスがいなくなり、何が起きたのだと落ち着いて考えてみようとする。

俺は路地裏でユリウスと会って、告白...されて、その後ユリウスの別邸で泊まって...まさか、

「死に戻った...？」

死に戻ったと仮定すればすべて説明出来る。

前日ユリウスと会った路地裏と今いる路地が酷似、いや全く同じで、つまりは路地裏がセーブポイントに設定されたということ。目覚めた時急にユリウスが上昇したように見えたのはきっと、スバルの膝辺りから崩れ落ちたのが原因だろう。咄嗟にでも膝から急に崩れ落ちた人を支えられるなんて、やっぱりいけ好かないやつだとスバルは思う。

ともかく、だとすれば問題は一つ。

「俺が寝てる間に死んだってことか？」

そう。スバルの持つ死に戻る前の最後の記憶は、ユリウスと一緒に寝たということだった。

寝る前にキス...されたけど...いかん。必要ない事まで思い出した。

ここで重要なのは寝ている間に死んだということ。

つまり、

「明日は早く起きて帰る予定だったから、寝て起きるまでの大体六時間位が死亡推定時刻か...って、なんか刑事っぽいこと考えてしまった恥ずかしい。」

腰と顎に手をあて考える素振りをしながら冷静に情報を開示しているせいで余裕があるように見えるが、その理由は至ってシンプルだった。

「そういや、初めてロズワール邸に来た時もこんな感じだったな...。」

この世界に来て二度目の死のループを引き起こした原因は、魔獣による捕食という名の呪術だった。

今回も同じような死に方なので、十中八九呪術による体内のマナの枯渇が死に至った原因だろう。

。

だったら、呪術師を探し出しユークリウス家の持つ別邸への襲撃阻止が、今回のループの終わり。

。

そこまで考えが纏まった所で足音が聞こえる。ばたばたと音はたてず、だが急いでいるというのが感じられた。どんな歩き方だ。こんな所で器用さ発揮してんじゃねえ。

「今竜者を手配した。立てるか？」

足音はスバルの座る椅子の前までで止まり、下を向いているスバルを更に下から見上げるように屈み声を掛ける。

「ああ、大丈夫。ちょっと立ちくらみしたみたいだ。そんな心配する事じゃねえよ。」

「だが一度診てもらった方が良い。ここからじゃ私の別邸が近い。フェリスよりは劣りこそすれ、この辺りではなかなかの腕だ。」

半ば早口でまくし立てられ、断る間もなくユリウスに膝と腰辺りを抱えられる。...ん？

「ちょっと待ったお前なにさらっと人の事横抱きにしてんのおかしくない？」

「立ちくらみならば立つ事は困難だろう。心配しなくとも、君を落とすなんて失態は侵さない。」

「別にそこ心配してねえし、問題はそこじゃないんだけどな!？」

スバルの叫びを華麗に流し、そのまま大通りの方へ歩く――かと思いきや、逆方向へ歩き始めたユリウス。頭の中に疑問符が浮かぶ。

「大通りだと些か人通りが多過ぎるのでね。それに、こちらの方が竜車を止めやすい。」

心の中を読んだかのようにつらつらと言葉を並べる。怖いもんだ。

なるべくこちらに振動が来ないように歩くユリウスにまた焦燥が込み上げるのを感じるが、如何せん羞恥心に染まった頭ではそれを口に出す事は出来なかった。

直ぐに竜車に到着し、慣れた手つきでスバルを竜車の座席へ乗せる。竜車を操作するのであろう少し白髪が目立つ男性と一言二言会話を交わし、ユリウスも竜車の中に乗り込んだ。

そこで、意識の隅に置かれていた事を思い出す。生地、時間、本、約束...

「おい、ちょっと待った!ベア子が...!」

「む。ベアトリス様と共に来ていたのか。ならばベアトリス様も...」

「呼んだかしら。」

「うおわ!」

呼んだ覚えは全く無いが、どうやら心の声が漏れ出ていたらしい。突然何もない場所から人が出てくるのは誰だって驚く筈だが、ユリウスは気にした様子も無い。

「お久し振りです、ベアトリス様。今からスバルを私の従者に診てもらおう、と。」

ただ一言、挨拶と今から何をするのか彼は話しただけ。なのにベアトリスは納得したような顔をした。

「だったらベティーは帰るかしら。スバルに傷を負わせたら許さないのよ。」

「おい、ちょっとベア子...！」

「承知しております。」

最後にユリウスの言葉を聞き、そのまま転移魔法で帰ってしまった。あまりの急展開についていけない。

「何だったんだよ...急に現れて急に帰るって...。」

「ベアトリス様は気付いているのか...。」

「ああ！？なんか言ったか！？」

「いや、特に何も？」

感慨深いと思っている事が滲み出る表情にそれ以上は何も言えず、動き出した竜車の中で別邸に着くのをおぼろげに待っていた。

-----

「特に異常は見当たりませんね。」

じっくりと時間を掛け診てもらった結果がこれなので、とんだ無駄足だったと思う。今スバル達はユークリウス家別邸にある、応接間にいる。理由は勿論診てもらうためだ。

「マナが乱れている訳では無いので、恐らく精神的な問題が発生しているかと。」

「そうか...スバル、何か心当たりでも？」

「無いと言えは無いし、あると言えはある。」

「どちらかはっきりしたらどうだ。」

「あるけど別に気にしないでいい事だよ！悩んでたって解決する話じゃないし。」

心当たりというのは二つある。一つはレムの事。“記憶”と“名前”、その両方を食い散らかした憎き“暴食”は未だ消息が途絶えたままで、解決の糸口は掴めていない。断絶する気配の無い悩みだ

った。

そしてもう一つ。死に戻り直後だったから。後者の方が圧倒的に精神的苦痛の度合いが高く、顔色が悪かったのは十中八九これのせいだろう。突破口が見えるのは遥か遠くの未来の話だ。とりあえず二つとも直ぐに解決出来ることではなく、気にしなくていいというのは本当だった。

「お役に立てず、申し訳ありません。」

「いえいえ、こちらこそわざわざ診てもらっちゃってすみません。ありがとうございます。」

色気のある髭を生やした従者は、己の無力を丁寧に詫び入り、そのまま奥の扉へ消えていった。

「...ユリウス。」

「分かっている。竜車で移動中の時から何か言いたげな顔をしていた。」

足音が遠のき、完全に何も聞こえなくなった頃合を見計らって声を掛ける。何か言いたさそうな顔をしていたらしく、すぐ本題に移れる準備は出来ているみたいだった。

「最近、この辺りで事件とか起きてねえか？」

「ふむ...記憶している限りでは、特にめぼしい事件などは無かったな。それがどうした？」

「...単刀直入に言うぜ。この辺りに呪術師がいるかもしれない。」

「ふむ...そうか。嫌な予感はしていたが、やはり...。」

「えっ、納得すんの？」

説得するのに様々な言葉を考えていただけに、ユリウスの判断に呆気にとられてしまう。

「帰ってくる時、シャクナールの鳴き声が聞こえてね。彼はそう鳴くことが無いので、少し訝しんでいたのだ。」

「そ、そうか...。」

そんなのは聞いた覚えがない。準精霊の力使って聴力上げてんのかこいつ。

「すぐに対処しよう。寝室で少し待っていてくれ。」

「なっ、そんな、俺も一緒にやるよ。」

「調査を依頼するだけだ。そんなにやろうとしなくていい。」

確かに、どこに呪術師がいるのか分からない今の状態では何も出来ない。スバルが出るのは呪術師の居場所が特定できた時だけだ。

「分かった。大人しく待ってる。」

「そうしてくれ。」

ユリウスは寝室の場所をスバルに教え、すぐ扉から出ていった。応接間ではなく寝室を指定した理由は分からないが、とにかく朗報を待つ事にした。

寝室では特にやる事もなく、近くにあった本棚から多少物色し読んでいた。勿論読めたのは、何故かあるイ文字しか書かれていない子供向けの本だけだったが。

そうやって時間を潰していると突然、爆発音にも似た大きな音がする。何かと外を見れば既に外は暗くなっている。本に夢中になりすぎてすっかり忘れていた。事件があったのは、日が完全に暮れてからだ。

急いで部屋から出て、誰かいないのかと走り回る。必死に探すも、誰一人とて見つからない。ユリウスでさえも行方を眩ませている。

道中、焦げたような臭いが辺りに充満し始めていた。そこで、先ほどの爆発音が屋敷に火をつけたのだと気付く。気付いた時にはもう遅く、屋敷のそこかしこに火が燃え移り、もう消火は不可能だと悟る。一縷の望みを、と向かった応接間には人気は無かった。ただ、皮膚や脂の焼け爛れた悪臭が辺りに充満する。その臭いの意味に気付き、込み上げる嘔吐感に必死に耐えた。

ユリウス、どこだ。どこにいる...?

遠くから甲高い、鉄がぶつかる音が聞こえた。それは戦場ではよく聞く剣戟の音に酷似し、頭が反応する前に身体がその場所へ向かった。

火の手は足の踏み場を徐々に無くしていき、あと数分もすれば完全に辺りは紅色に染まるだろう。それでも足は逃げを選ばなかった。

音が近づいてくる。見ればユリウスと思しき人物と、もう一つの人影が存在し、彼等を囲む空間は周りよりも崩壊が激しくなっていた。

「ユリウス！」

「スバル！？こっちに来るな！」

大丈夫か、と続ける筈だった言葉は直後に発したユリウスの叫びに掻き消された。

その真意を問いただそうと口を開けば、熱い煙を吸い込み咳き込んでしまう。涙で潤む視界の端に一つの影が物凄い速さで向かってくるのが見えた。真上から下ろされる鋭く光る切っ先を、咄嗟に身を捻らせ避ける。バランスが悪かったのか床に転げ落ちたが、敵の追撃はユリウスによって阻まれた。だが、今の状態を見る限りどちらが優勢かは明らかだった。煙によってだんだんと動きが鈍くなるユリウスに対し、敵はどんどん動きを速めていっている。ユリウスが傷を負う回数も増えていて、今のままでは二人揃って死んでいくの目に見えていた。

そこまで考え、ある結論に至った所で、スバルに浮遊感が襲う。突然のことに驚くが、気付いた時には地竜――シャクナールの背中に乗っていた。

「お願いだ。連れて行ってくれ。」

シャクナールはすぐに動き出す。崩壊が進む廊下を颯爽と走り抜け、外へと出る。

後ろで一回爆音が響き渡り、ガラガラと音をたてて何かが崩れ去っていくのを耳にしたが、目を背後に向けることはついぞ無かった。

シャクナールに走らせてどのくらい経ったのだろうか。何時間も過ぎた訳では無いと思うが、体感時間は長いような短いような、そのどちらでもないよく分からない感覚に襲われる。

鬱蒼と茂る木々が辺り一面を覆っていた景色が変わり、月明かりが真っ直ぐ射し込む見晴らしのいい崖に辿り着いた。

シャクナールから降り、崖の一端まで向かう。崖の底は暗くて見えず、それは落ちたら死ぬという恐怖心を煽るばかりである。だが、スバルにはそんな事など関係無かった。もうとっくに覚悟は出来ている。

シャクナールは近くの木陰に腰を下ろし身を休めていた。これからどうするのかなど検討も付かないが、きっと最期まで此処に居てくれる。向かう場所からもう察しがついていたのだろう。

悪戯に死を重ねている訳じゃない。失った生命を拾い上げる為に、この能力を使う。

一步を踏み出せば後は簡単だった。徐々に増す加速度と浮遊感に比例するかのよう恐怖心が膨らむ。閉じてしまった瞼の裏に、今回のループの記憶が映し出される。

ユリウスは、スバルの凍った心を溶かしてくれた。愛を与えてくれた。またあの笑顔が見れるのなら、笑い合える日が来るのなら。

菜月・昴は数え切れない程の愛を、愛する人から貰った。その恩は、返すべき愛はナツキ・スバルの大切な人に与えてくれと言われた。

なら、ナツキ・スバルはやらなくてはならない。昴がもう二度と返すことの出来ない愛を、行き

場を失いかけた想いを、スバルが大切だと思う人に与えなくてはならない。

死に恐怖し閉じていた目を開く。段々と近づいてくる死。目を逸らしかけたが首を振り、静かに前を向く。

「待ってろ、ユリウス。必ず救ってやる。」

ここに一つ、生が潰えた。彼の最期の言葉は最後まで言えたのだろうか。その事実を知る者はもういない。

襲い来る残酷な未来を書き換える為、ナツキ・スバルの三度目の戦いが始まる。

-----

死んだと思った瞬間、またあのセーブポイントに戻ってくる。夢みたいに不確定な雰囲気漂う空間から現実に戻り、その感覚には今も慣れやしない。

「...今の一瞬で少し顔色が戻っている。何があったかは分からないが、体調の方はどうだ？」

「心配するようなモンじゃねえよ。大丈夫だ。」

少し驚いた顔をし問うユリウスは、スバルの答えを聞いて露骨に安心したような面持ちになる。もう、あんな顔にはさせたくない。ユリウスには、暗い顔は似合わない。コイツは嫌味ったらしい気障な面構えしてればいいんだ。これはその為の相克。その為の膳立てだ。

「ユリウス。」

「どうした。」

優しい声色で返すユリウス。その声を、今は隠れた笑顔を取り返す為、酷く安心する居場所を奪還する為スバルは戻ってきた。

「好きだ。」

その言葉を聞き、ユリウスは再度驚愕の色に染まる。いつか見たその表情に、少しばかりの優越感を抱く。

「お前の力を貸してほしい。」

これは本心から出た詞。独りでは決して出来ない事をするから。頼らせてくれるんだよな？

愛する最優の騎士様はそっと表情を崩し、綺麗な笑みを浮かべる。

「勿論だとも。私の愛しい人。」

ユリウスは自然な流れでスバルの右手を取り、甲に口付けた。

-----

「今夜、お前の別邸が襲撃される。火も放たれるから早くに手え打つとかないとヤバイ。」

「別邸とは思いついたものだな。何が狙いだ？」

「その辺はよく分からねえけど、少なくとも全滅は狙ってると思う。」

「そうか...ともなれば、目的はユークリウス家の家督でも財産でも無さそうだな。」

場所を変えよう、と言われ昼間の喧騒が残る街を後にし、今はユークリウス家の別邸へ向かう竜車の中だ。

既にベアトリスはロズワール邸へ移動中である。

「これ、自分でも言ってて思うけど、頭おかしいだろこんなの。まるで未来予知みたいな事言って...。」

未来予知も何も、過去見た未来なのだから必ず起こる出来事だ。それを言えるはずもなくただ淡々と起こり得る事を話しているのだが、これだけ聞けば病気を心配されるレベルだということは知っている。少し前に信じると言われたばかりなのだが、事が事なだけに疑い深くなるのは仕方ない。

「先程も言ったはずだが？」

「ああ、確かに聞いたよ。信じるって。」

「それが答えだ。愛する人が助けを求めたのならば、それに応えたいと思うのが普通ではないのか？」

一を聞いて十を知るとはこの事なのだろうか。本当はどう思っているのか聞きたいだけなのに、気恥ずかしくなるような言葉ばかりが返ってくる。おかげで顔が暑い。恐らくは真っ赤だ。

「君のその千変万化する表情は飽きないな。...っと、そろそろ着くみたいだ。」

屋敷が見えてくる。これで三回目。ユークリウス家の別邸が舞台の物語は、ここで終止符を打とう。

そう決意を心の中で固め、近づいてくる門をじっと見ている。

「近々この屋敷に襲撃者が現る。その為に、暫しの休暇と称して避難をしてほしい。」

そう簡潔に説明され、それにすぐ納得、休暇の準備を始める使用人の行動力に驚く。ここで駄々をこねられても困るだけだがそれにしても慣れすぎている。

「このような事は度々あるからな。要らない場数ばかりを踏んでいる。」

そりゃあそうだ。貴族なら問題事は山ほどあるだろう。にわか知識だがその位は知っている。

使用人全員が屋敷から出るのを見送り、すぐ対処の仕方を考案する。流石に急ごしらえだがこれで何とかなるだろう。

極度の緊張からか喉がカラカラで、それを気遣い水を持ってくると台所の方へ行くユリウスを見送ったのは間違いだった。

突然大きな音が鳴る。デジャヴを感じ一瞬青ざめるが、今回は衝突音らしく硬いものが崩落する音が聞こえた。

玄関の方から音が鳴った為すぐそこに向かう。だがそこには崩れ落ちた扉しか見当たらず、人の気配は全くない。

当然ユリウスの気配もなく、恐らくは襲撃者を追っているのだろう。今回の作戦はスバルが敵を引き止めている間にユリウスが奇襲を仕掛けるというものだった。すぐに見つけなくては。

だが、なかなか見つからない。焦る心が身体能力を低下させる。何も考えられない。ただユリウスを探すロボットと化していた。

と、そこでようやく紫色の人物を見つける。

「ユリウス！」

良かった、無事だ。襲撃者も倒れていた。外見は男性らしい骨付きをしている。かなりの戦いだっただのか、ユリウスの肩は激しく上下に動いていた。目線だけがスバルの方を向き、その緩慢な動作は戦いの疲れを表している。それに酷く安堵する。

今回の死のループは終わったのだ。身に起こる悲劇を嘆かなくていい。また言い合いながら話ができる。なのに、

「スバル！」

———なんでそんな怖い顔しているんだ？

近づく美丈夫の顔。ドン、と突き飛ばされる感覚。見える全てがスローモーションとなり、鮮明に見えている。だが、身体は動かない。動かそうと思えば動かした筈なのに、深層心理が邪魔をしたかのように頭の中はどこか霧がかかっていた。

突き飛ばされた事により前後が反転した世界で、鮮やかな赤が飛び散る。その赤はスバルの横を素通りし、大層不吉な音をたてながら床に接触する。尻に衝撃を感じるが、さほど気にならない。スバルと共に崩れ落ちた目の前の何かの方が気になってしょうがない。

混乱し、流れてくる数多の情報に頭の回線が耐え切れず火花を散らし始める音が聞こえる。それでも考えることをやめない。やめることが出来なかった。必死に現在の状況を理解し、酷使し過ぎて痛んできた頭の中にインプットしようとする。

なんで...なんで、なんでなんでなんで———

「イア...スバ、ルを...たの.....む」

ユリウスの声に呼応するようにふわふわと辺りを漂い始めた淡い赤色の光。ユリウスと契約を果たした準精霊の一つが揺らめき、契約者を心配しているのが伺える。

腕の中にいるユリウスの息はもう絶え絶えで、早く治療をしてもらわねば息絶える事は目に見えていた。どうしようと焦り深みに嵌っていくスバルの意識を浮上させたのは、背後から聞こえた舌打ちだった。

「あーあ。カンケーない奴まで殺しちゃったじゃねえか。どーすんのさコレ。」

「知らないね。あんたがしくじるからでしょう。このガキを殺す為だけにどんだけ時間掛かってんのよ。」

二つの異なる音が聞こえる。音のする方へ顔を上げれば、二人の男女と思しき者達が呑気に話していた。

男性はエルザの持っていたククリナイフにも似た武器を持っている。もしかしなくても彼はさっきユリウスと戦い、負けた人なのではないのか？女性の方は短刀を両手に携えていた。どこかで見た覚えのある姿だった。

互いに衣服は血に汚れ、今正に襲撃していますと全身で語っているようで。更に、女性の持つ短刀には赤が滴っており、先刻何かを斬ったと思われる情報が残されていた。

そこまで考えて、漸く察知する。

襲撃者は単独犯などでは無かった。当たり前だろう。国の中で実質三番目の強さを持つユリウスが住まう場所に、たった一人襲いに来るなど無謀過ぎる。それに、女の方は前回の周回でユリウスと戦った相手ではないか。

「なんで...俺なんか...」

「なんでも、お偉いさんの機嫌を損ねちゃったんだと。歯向かわれた拳句“英雄”なんて称号貰われて...余程ムカついたんだねあのお偉いさん。」

「おい、そこまで言う必要は、」

「イイじゃん。どうせ死ぬんだから、種明かしくらいなんて事無いでしょ。」

女は愉しそうに手の中の短刀をくるくると回す。遠心力により短刀に滴っていた鮮血が飛び散り、スバルの頬に一線を引く。

つまり、つまり女が言う事が本当なら...

気付かなきゃいけないのに気付きたくない、そんな矛盾した感情が込み上がり、吐き気がしてくる。

身体は気付いていたのだろうか。ガタガタと震え始める肉体は、スバルの精神よりも先に何を悟ったのだろう。

「じゃあ、これでバイバイ。」

「来世では精々、恨まれない人生を送る事だな。」

そう言い、スバルの正面から刃を振り下ろす。一切迷いの無い軌道に震える身体は逃げる事を選べず、来たる痛みを目を強く閉じた。

だが、鋭い痛みを受ける前に頭上から爆発音と共に肌が焼けるような熱さを感じる。

何事かと閉じていた目を開くと、そこには短刀を床に落とし両目に手をあて悶える男女の姿と、

ふわふわと浮遊する赤い光———エアの姿があった。

呆然とその光景を眺めていたスバルの手を、何かが包む。ユリウスの手だった。

「ユリ、ウス...」

なんでこんな時まで。そんな言葉は続かなかった。

「行け...スバ...ル.....」

「でも、お前が」

「逃げろ！」

それが、スバルの聞いたユリウスの最期の言葉だった。

跳ね上がるように足に力を入れ立ち上がり、そのまま近くの扉へ走り出す。後ろから聞こえる声など耳には入って来ない。体制を崩しながらも直ぐに持ち直し、扉を一つ、また一つと潜り抜け、屋敷を出た。

走る。走る。緩やかに流れる川を横目に。土を蹴り、風を斬り、木を避け、何も考えずに、スバルは必死に逃げた。

気が付いたら見知らぬ場所にいた。あの場所からどの位離れているのか検討がつかない。時間も分からない。いつの間にか辺りは暗くなり、電灯のないこの世界では、光り輝く星々や元の世界で言う暁月にも似た月が唯一の光源となる。足元を薄く照らされており、目の前には崖が広がっていた。

屋敷での死のループで自殺を図ったり、魔女教大罪司教ペテルギウス・ロマネコンティと対する際選んだあの場所と酷似しており、最適な場所だとスバルは無意識の内に思った。そして、前回の死に場所を選んだのも此処だった事を思い出す。

だが、今回は前回と決定的に違う所があった。

崖の一步手前で立ち止まる。あと一步踏み出せば重力に従い落ちるだろう。

大切なものは何も救えない。巢食われているのは自分だけ。

憐れなほどの運命に自然と笑みが込み上げる。顔が引き攣るようなそれは嘲笑にも似たなにかだった。

脆かったのであろう崖の先端、スバルが今立っている場所が崩れ落ちる。死に方ですらこんなにも愚かなのか。

涙が枯れ果てる。スバルの中から一滴たりとも残らず朽ち落ちた雑音。治すことも拾うこともしない。してはいけない。

彼が望んだ未来を、彼は取り零した世界に置き去りにした。

---

「おっちゃん！リング十個！」

「おうよ。兄ちゃん久し振りだな。いつもの連れは居ねえのか？」

「今日は一人でおつかいだよ。フレデリカがリングパイ作ってくれるらしくて。おっちゃんの所はまた客が居ねえのか？」

「うるせえよクソガキ、追い出すぞ。」

繰り返される常套句を口に出し、いつもみたくリングを買う。

流れ作業にも似たその行為は、幾度となくセーブポイントになったこの場所に対してなのか不思議と安心出来るのだった。

ユリウスと最後に会ったのは昨日。どれだけ意識から消そうとしても、あの時の情景は鮮明に瞼の裏に焼き付いていた。

---

「...バル.....、スバル？」

意識が戻った、と知覚したスバルの頭が最初に認識したのは、自身を下から覗き込むユリウスだった。瞬間、ゾワッと寒気にも似た何かが背中を流れ、咄嗟に一步下がった。至近距離から覗き込んでいた顔は今は少し離れており、その事に心のどこかで安堵していた。

「...何があった。今の一瞬で君のそれは明らかに澱んだ。」

こそあどで聞かれたって分からないと思ったが、ユリウスの視線でその考えは滅失する。目だ。ユリウスはスバルの目を見て話していた。

「澱んでるって凄い表現だな。」

真っ直ぐこちらを見る琥珀色の目に居心地の悪さを感じ、思わず目を逸らす。

「瞳に光を宿していないと表した方が良かったか？」

文字列こそ穏やかだが口調は怒りを含み、また、焦りにも似たものが感じ取れた。  
これ以上ここには居られない。何かに揺らぐ心を押さえ付けながらスバルは笑みを貼り付けた。

「悪いな、心配かけて。別に大丈夫だよ。」

「何を根拠に大丈夫だと言える...？」

「俺が大丈夫だって言ってる。」

「青ざめ、何かに堪えてるように悲痛を叫ぶ顔の何処に安堵出来る要素がある！」

「...お前には関係ないだろ。そろそろ時間だから帰らせてもらうぜ。じゃあな。」

「待て！まだ話は...」

静止を待たずその場から立ち去る。一度も振り返らなかったスバルには、ユリウスがどんな顔をしてスバルを見送ったのか分からなかった。

その後直ぐにベアトリスと合流。手芸用品の入った袋が見当たらないとベアトリスは訝しんだ表情をしたが、布は買えなかったと伝えれば何かを汲み取ったような顔ばせで、「そう。」と一言言った。

竜車に戻る最中、スバルがにこやかにベアトリスに話し掛け、ベアトリスがやり場のない感情に耐えるかのような顔で対応するそのやり取りは、全てがあべこべだった。

---

思い出した昨日の出来事を頭の片隅に置きやり、カドモンから渡した銀貨の分よりも多いリングを受け取った。店主の心遣いに苦笑し、その場を後にする。

あの時、切り捨てるような口調で断ってしまった事を嘆きこそすれ、後悔はしていなかった。あのままユリウスについて行けば、また襲撃が来るのは目に見えていた。  
現に、一日経った今でもユークリウス家襲撃の話は聞かないし、更にはロズワール邸に帰る途中の竜車にて襲撃された。  
幸いにも、というより事前に対策をしていた為、一人の負傷者も出す事無くこの事件は収束を迎える事となる。

多分、ユリウスは勘違いからあの様な感情を抱いてしまった。弱いスバルに、騎士としての庇護欲でも掻き立てられたのだろう。最優ともあろうに、自分の気持ちを取り違えるなんてな。

今は夕飯の支度を始めるような時間帯の為、人通りが少なくなりはじめている。陽も次の日の為の準備をしていた。

おもむろにジャージのポケットから小瓶を取り出し、気を抜けば吸い込まれそうな、まるで深海のような藍色をしたその蓋を開ける。

キュポン、という心地良い音をたてて開けられた小瓶の中で、無色透明な液体が揺れ動き波紋を描いた。無臭のそれを一気に煽り、味を感じる前に嚥下する。そもそもそれには味すら無いのだが、それを飲んでると知覚したくはなかった。

服用は極力抑えている筈なのに、次から次へと瓶に手が伸びるのを止められずにいた。必要最低限の数滴から、一日も経たずして服用の限界量を求める位には。

「イタイなあ...。」

ふと、綺麗な橙色に染まった空を見上げる。夕日の煌めきによって照らされた漂う雲は、その位置を忙しなく変えていく。

そっと瞼に触れた。閉じた瞼に映る景色に一瞬、息を呑む。

効果が切れれば正気を失う程次を欲し、飲めば言い表せない安心感が得られる。それはまるで麻薬のようで、止める事が出来ない。

飲む事で得られるものは多くは無い。現に、その代償として痣が出来始めている。今はまだジャージの下に隠れる位小さい痣ではあるが、いつかジャージでは隠れられない程の大きさへ成長するのだろう。自身の弱さが招いた結果である。仕方が無い。

街から帰ったその日の内に、スバルはロズワールのいる執務室に赴いた。その時ロズワールにスバルが言い放った言葉は、奴の道化の仮面を剥がすには充分過ぎるぐらいだった。

最後に見たのは聖域での交渉の場だったと記憶するスバルとしては、気分が良くなったのは言うまでもない。

「精神安定剤ってあるか？」

これ以上大切な人は作らない方が良く。結局最後は自分に巻き込まれ死ぬのだ。

スバルの周りには死が必ず付き纏う。親しくすればするほど死の可能性は上がる。皆で笑って生きていけるエンドに、無用な死は必要ない。

ただひたすらに自分は情けなかった。  
全てを拾い尽くすには手が足りなくて。  
決して諦めてはいけないと知っていても、  
手から零れ落ちる大切なものは、  
有する事を二度とさせてはくれない。  
理解はとうの昔にしていた。  
運命を変える事は出来ないと、  
スバルは逃げた。

リングが沢山入った紙袋を抱え直す。視線は自然と前を向き、行きに乗ってきた竜車を捉える。  
迫り来る死に逃げる事も出来ず怯えながら、少年は独り、歩みを進めた。

この出来事から一年も経たずして、水上都市プリステラを舞台に彼はまたしても“英雄”となる。

## 後書き

はじめまして、望月と申します。企画に参加するのもそうですが、そもそもネット上に小説を挙げるのが初めての事なので至らない部分が多々あるかとは思いますが、どうか大目に見てください。

今回書かせていただいた小説のサブテーマは【言葉遊び】です。タイトルからもう既にそうですね。他にも色々と混ぜ込んであるので、全て探し当ててもらえたら嬉しい限りです。

私はこの素晴らしい企画に参加出来たことを、誇りに思います。企画創設者でありながら小説も書かれたり一え様、素晴らしい作品を作られた四名の小説家様、並びに六名の絵師様、心より感謝申し上げます。

最後になりますが、アニメ『Re:ゼロから始める異世界生活』完走おめでとうございました。作品を知れて、好きになれて本当に良かったです。ありがとうございました。

## 絵の感想

全ての絵が公開された時は驚きましたね。満場一致でスバルがいる。皆さんスバル好きすぎなのではないのでしょうか(笑)

それはともかく、私が担当させていただいたのはシズナ様の作品です。シズナ様が描かれた絵はとにかく可愛らしいです。色もはっきりと境界線が分かるのですが、その中にどこか繊細さを感じます。語彙力が無いので凄いの一言しか出ませんが(笑)表現し切れない程の可愛さです。

短い感想文ですが、私の抱く精一杯の気持ちを綴らせていただきました。シズナ様、素晴らしい絵をありがとうございました。

表紙・シズナ様

文・望月様



## V. 彼との約束



約束、  
なりました、  
。

この小説には、web最新話までのネタバレが含まれます  
ご注意ください

「彼...スバルは、単なる友人ですよ。私が、誰よりも敬意を抱く」  
声は、震えてはいなかっただろうか。  
私はうまく笑えているだろうか。  
彼女に、違和感を感じさせない『ユリウス・ユークリウス』で在れているだろうか。  
彼の返答に、美しい銀髪的女性は戸惑った様に微笑み――

握りしめた掌には、血が滲んでいた。

彼との約束／

その日は朝から大忙しだった。  
美しく整えられた庭。走り回る使用人達は屋敷中を磨き上げ、厨房からは引きも切らずに食欲を刺激する香りが漂う。  
やがて日が暮れると、優美な造りで王都中にその名を轟かせるユークリウス邸の門前には、何台もの趣向を凝らした竜車が横付けされた。  
屋敷に足を踏み入れる誰もが、趣向を凝らした装いに身を包み、満面の笑みを浮かべている。  
料理人達が数日かけて仕上げた料理が所狭しと並ぶ大広間は、銀食器と宝飾に反射する光で、夜だというのに眩いほどだった。  
その中心、人々に囲まれ、口々に祝いを述べられている青年に幾分年嵩の、それでも彼にそっくりな男が近づいた。彼の姿に気付いた者から1人2人と、微笑ましいとばかりの表情を浮かべて距離を取っていく。  
あっという間に、彼らは2人きり取り残されていた。  
「どうだ、ヨシュア」  
楽しんでくれているか、その言葉に青年は眉根を寄せた。  
「いくらなんでも、やり過ぎですよ兄様」  
そっけない言葉。だが、興奮に紅潮した頬も緩んだ口元も、浮き足立ったような雰囲気も。その全てが、嬉しくてたまらないのだと示していた。  
それでも懸命に不機嫌を装おうとする弟に、ユリウスは手に持った皿を差し出す。

「さっきから少しも食べていなかったらう」

話すのもいいが、しっかり食べるといいと差し出された皿の中の、いや、今日この場にある料理の多くがヨシュアの好物ばかりだ。

何せ――

「今日はお前の3回目の――そして、20歳の誕生日なのだから」

その言葉にヨシュアは眉根に込めた力を抜いた。

脳裏に蘇るのは、目を開けた瞬間に飛び込んできた兄の顔。泣きそうな程の安堵と、泣きそうな程の悲痛さに歪んだ表情をヨシュアは知らなかった。

目覚めて知らされたのは、自分があのプリステラで暴食の権能に囚われて三年もの間世界に置き去りにされていたこと。

同じく、暴食に存在を奪われた兄とその協力者が暴食を打ち倒し被害者を解放してくれたこと。きつくきつく抱きしめてくる腕もそれを告げる兄の声も、小刻みに震えていたのを、昨日のように覚えている。

それから初めて迎える誕生日。

3回分を一度に祝うのだと、兄らしくもない子供のような提案で開かれた呆れるほど豪勢な宴。なまじ、ユークリウス家も、彼らが仰ぐ主人であるアナスタシアも資産を喰るように持っていたから始末に悪い。

まさか贈り物に埋もれて死を覚悟する日が来るとは思わなかったと、今朝の悪夢を思い出しヨシュアはブルリと背筋を震わせた。

「20歳になったのだから、飲んでみるといい」

差し出された盃をなみなみと満たすのは、飲みやすいと評判の名酒。お値段は王都で一家4人が一月遊んで暮らせるほど。

受け取って、ヨシュアはまるで初めて飲む人間に酒を進めるかのような兄の言葉に首を傾げた。

「飲んでみるといいって...何度も一緒に飲んだではないですか」

2人とも決して酒豪と言うほどではなかったが、貴族の嗜みの一環としてヨシュアが酒を飲むことを許されるようになった日からは食前や食後に、あるいは寝酒を重ねたこともあった。

「ああ...」

そうだったと、どこか遠い目をしたユリウスは呟いた。

「兄様は、20歳と言うことにもとてもこだわっていらっしゃいましたが、20歳になるということには何か意味があるのですか」

20歳の誕生日なのだから、盛大に。

準備中に何度も聞いた兄の言葉。

確かに節目の年ではあるが、特に大きな祝いをする風習はないのにと、その度不思議に思っていた。

それでも、歴史や仕来りに詳しい兄が言うのだから何か意味があるのかと考えていたが。

「ああ、いや――20歳を成人の節目にする地域があると、そんな風に聞いたものだから」すっきり影響されてしまったと、見たこともないほどに柔らかく、ユリウスは笑った。

主役をいつまでも独占しては不味だろうとその場を離れたユリウスは、一心不乱に食べ物を口に詰め込んでいる知己を見つけた。多少荒くはあるがきちんと躡けられた作法。彼そのものだなと、笑いが溢れた。

「何ッだ、あんたか」

ぎっと、条件反射のように向けられた鋭い視線が、ユリウスを認識して緩まる。

「我が家の料理は堪能していただけているだろうか？」

「あア、中々じゃアねエか」

未だ成長盛りの青年の前に積み上げられた皿が、その満足を示していた。

「そうッだ、この後で一本やらねエか」

鋭い目が、戦意を帯びて剣呑な色を放つ。

ぶつけられる意思是、何処までも真っ直ぐで気持ちがいいほどだった。

それでも、ユリウスは首を横にふる。

今日は彼の弟のための舞台だと理解しているガーフィールも、そうかの一言であっさりと引く。意外と理性的で周りを見る事ができる――それは、彼も褒めていたガーフィールの美点だった。

「そッれにしても、分ッかんねエもんだよ、なア」

口一杯に頬張った肉を、ゴクリと飲み込んで。

ガーフィールはその鋭い歯を覗かせる口元から、疑問をこぼした。

「あの『最優の騎士』様に稽古をつつけてもらう日が来るなんてなア」

恵まれた才能のままに力をつけていくガーフィールに、闘いの型を学んで見てはどうかと話を持ちかけたのはユリウスだった。学ぶと言っても、そこは天性の感覚と、吸収力に優れた彼だ。ほぼ全ての時間を、実戦形式の手合わせに費やしている。

当初の――ユリウスが出会ったばかりの彼なら、一度は反発しただろうが。

「まア、ありがたかったけツとよオ」

俺様は、エミリア様を守んなきゃなッんねエから。

寂しげな目をしてそう告げた彼は、ユリウスが羨望を抱くほどの速さで成長していった。

あいつはもっと強くなると、彼が告げた通りに。

元より家族を守るために強くなることを欲していた少年だったが、今や彼の見せる強くなることへの貪欲さは時に見ていて空恐ろしくなるほどだ。

それも仕方がないことかと、ユリウスはそっと目を伏せた。

今や彼が強くなることは義務だった。

エミリアの最後の盾――彼女のたった1人の騎士である彼が、強くあることは。

「でもなア、なッんで――」

所在なさげに壁に寄り添う少女に、ユリウスはヨシュアにしたのと同じように、美しく料理を盛り付けた皿を差し出した。

パチリ、と優しげに垂れた目が瞬く。

「ユリウス様...」

いつものメイド服を脱ぎ、レースや生花で飾られた可愛らしいドレスを纏ったロズワール邸の双子のメイドの片割れはより一層その幼げな顔立ちが引き立っていた。

「壁の花にするには嘆かわしいが」

華やかに着飾った貴頭が蝶のように行き交うホールの中央に、出るつもりはないかと告げる言葉に、彼女は肩まで伸びた美しい青髪を揺らして首を振った。

「いいえ...レムはこの様な華やかな席では、気後れしてしまって」

給仕としてなら慣れているのですがと、少し俯いた少女の手に少々強引に皿を持たせる。

淑女に対して相応しい対応ではないかもしれないが、遠慮がちな彼女には多少強引に接することも必要だと彼は言っていたから。

「無理に中央に出て欲しいとは言わないが、出来ればこの場を楽しんでもらいたい。

今日は私の弟の誕生日であるのは確かだが、君のための宴でもあるのだから」

ユリウスの言葉に嘘はない。

この場には、本来ユークリウス家とも、ユリウスやヨシュア個人とも、王都とも関わりのない人々———プリステラで、暴食や色欲の大罪司教によって唐突に姿や存在を奪われた被害者や、その家族も大勢招待されているのだから。

その被害者の1人であり、彼が誰よりもその存在を取り戻したいと願っていた彼女にも是非、今日という日を祝って欲しかった。楽しんでもらいたかった。

———ひよっとしたらそれは、ユリウスの身勝手なエゴなのかもしれなくても。

それでも。

だって彼と———

「ありがとうございます.....本当に、ユリウス様にはお世話になりっぱなしで」

ぱちくりと、渡された皿を見ていた少女は何処か儚げに微笑んだ。

「せっかく招待していただけたのですから、レムも楽しみたいと思います」

そして、ふと。

「それにしても———」

「ああ、ユリウスさんお久しぶりです」

商人の青年が、相変わらず何処か気弱げな笑みを浮かべながら挨拶をしてきたのは、レムと別れ

てユリウスが歩き出した直後のことだった。

「君も来てくれていたのか」

招待状こそ送ったが、普段住んでいる場所が場所だ。彼がくるのは難しいのではないかと思っていたが。

「そんな、恩人の招待を断るなんてとんでもない！」

この場に駆けつけるために余程に無理をしたのだろう、大仰に首を振る彼の目の下には隈が出来ていた。

無理をさせたかと、悔いるユリウスの内面を見てとったのか。オットーは苦笑してみせた。

「そりゃあ、結構大変でしたけどねえ。カララギからの移動時間に、業務の前倒しに」  
何徹したっけな...と遠い目をした彼はしかし。

「それでも、絶対にこの祝宴には参加したかったですし」

人々の顔に浮かぶ笑顔を、幸福そうに見る彼も三年前のプリステラ襲撃事件の当事者だった。

それも、暴食と遭遇し目の前で共闘していた味方を食われたのだと聞いている。

無残に姿を変えられ氷の中で眠らせるしか無かった、あるいは誰からも存在を忘れ去られ死んだ様に眠りに付いていた彼らの顔に笑顔が浮かんでいるのを見るのは、相当な感慨があるのだろう。

「あちらでも大変なことが多いのでは？」

ユリウスの言葉に、オットーは目を泳がせた。あーと、呻く様な言葉と共に、ワタワタと意味もなく腕を動かし。

「確かに、押しの強い人も多いですが。それでも、やり甲斐がありますよ。

ずっと行きたかった場所ですから」

真っ直ぐな目が、ユリウスを写していた。

「だから、ユリウスさんには感謝しているんです」

期限が決まっても、純粋に商人としてではなくとも、憧れた場所で過ごしていることを。

オットーに、国家の混乱に伴って中断していたカララギとの通商再開についての交渉を任せたらどうかと提案したのはユリウスだった。

国家を背負っての交渉ごとを抱えながらも、憧れの国で「自国」を売り込む大商いをする彼は、本人の言う様に充実しているのだろう。

何の因果か、エミリア陣営の内政官なんてものになってしまったために商人という自身の夢を棚上げし続けてはいても、彼の本質はやはり「商い」にあるのだろうから。

人の本質は変わらないと、そういったのはユリウスの主人だった。

彼も、オットーが欠くことのできない人材だと自陣に引き込みながらもその夢を妨げていることには後ろめたさが残っている様だったから。

――ユリウスにして見れば、そんな罪悪感を抱く必要があるかは謎だったが。

少なくとも、候補者と騎士が底抜けのお人好しと世間知らずの陣営をオットー自身が放って置けなかったのだけは確かだろう。

それが誰も彼もを引き寄せる彼らの魅力だった。

「でも、ユリウスさんーーーー」

「ユリウス！」

その声に、その場の誰もが膝をついた。

「皆、立って！パーティーを続けてちょうだい」

傅かれることに未だになれない彼女は慌てた様子を垣間見渡した。

その言葉に従い、再び宴は踊り出す。

ああ、良かったといっそ単純なほどに明らかに顔に書いてある様子に、この方はいつまで立っても変わらないなと強く思った。

彼が愛した彼女は、どんな立場になろうとも変わらない。

「陛下」

改めて、国家の頂点に立ち王冠を戴く彼女に頭を垂れた。

「本日は我が弟のーーーー」

「頭を上げて、ユリウス」

紫玉の目が、ユリウスを写していた。

「皆が元気になってくれて、笑える様になってくれて。

私もすごく嬉しいの。

こんな素敵な場所に招待してくれてありがとう、ユリウス」

プリステラで、どうしようもないとは言え、時間を稼ぐためとは言え、色欲の被害者を氷漬けにしたのは彼女だった。

ーーーーどれほどまでに、彼らの解放を心待ちにしていただろうか。

そして、万が一にも彼らを起こすことに失敗したらと、どれ程の不安を抱えていただろうか。

氷を解いて、彼らを解放した時。

良かったと呟いた小さな声を、滑らかな頬を流れ落ちた涙を、ユリウスは知っている。

「彼らも、陛下のお姿を見て喜んでのことでしょう。

本日は存分に彼らの笑顔を楽しませてください」

「ええ...ベアトリスと一緒に来てくれなかったのは、残念だけど...ごめんなさいね」

連れてこれなくて。エミリアの顔が少女の姿をした精霊を案じて曇った。

「...ベアトリス様は」

「ええ、まだ城の書庫から出てくれなくて」

燃え落ちたロズワールの屋敷の禁書庫の代わりだとでもいうように、ベアトリスは広大な王城の書庫の一角に引きこもっていた。

顔を出せば話はする。自身の未来を悲観しているわけでもない。だが、その場所から出る事を頑なに拒むのだ。

「...私もまた顔を出そうと考えています」

ほんの僅か唇を嚙んで。ユリウスは安心させるように笑う。

「そう、ね。ベアトリスもユリウスの事は気に入っているみたいだから...」

ありがとう、ともう一度告げて。

「私、本当にユリウスにありがとうって言わないといけないことだらけね」

ふわりと、銀色の長い髪が揺れた。

「いつだって私に気を使ってくれることも、怠惰の大罪司教から私達を守りに来てくれたことも

、あなたを覚えていない私たちに協力して砂漠の塔まで来てくれたことも」

指折り数えて。

「それに―――私を推すように、アナスタシアを説得してくれたことも」

プリステラで無理をしてゲートを使用し、その後も襟ドナと交代をすることが出来なかったアナスタシアは大きく体調を崩した。

商会の代表者としての立場こそ残したものの、実務は他者に引き継ぎ。とてもではないが王選どころではないと、命を縮めるだけだと、諦めざるを得なくなった時。

エミリア陣営に協力しようと、主人の背を押したのがユリウスだった。

ねえと、かつての少女の面影を―――それにどこか陰を加えたような美しい女性が問いかけた

。

「どうしてユリウスは、私を王にしようって思ってくれたの？」

―――対外的な理由ならいくらでもあった。

例えば、正式な候補者といえどハーフエルフと言うことで味方の少ない彼女側に合流すれば、勢力の大きなこちら側が主導権を握れることも多いただろうとか。

より恩を売れるだろうとか。

お人好しな彼らなら候補者を降りたアナスタシアのことを無碍にはしまいとか。

どれも、ユリウスが自陣営を説得する時に連ねた言葉だった。

何度もなんども聞かれた言葉に、同じように。

その時と同じように、答えれば良かったのだ。

だが。

その真っ直ぐな目が―――

「彼に、スバルに頼まれましたから」

溢れた言葉に、誰よりもユリウス自身が驚いた。

決して、言うつもりはなかった言葉だった。

言えるはずのない言葉だった。

言いたくないと、口を閉ざしたのは彼自身。

そして、彼女は口を開いた。

「ねえ、ユリウス

スバルって、誰のこと？」

ユリウスが、絶対に聞きたくないと逃げ続けた言葉。

絶望が、顎門を開けてユリウスを飲み込んだ。

その一言だけは、聞きたくなかったのに。

「20歳になるとお酒を...そんな地域もあるのですね。兄様のお知り合いがいらっしゃるんですか」

「でもなァ、なッんであんたが俺様に稽古つけようなんて考えたんだァ？そんな関わりもなかったのに」

「それにしても、どれもレムの好物ばかりです。どこでお知りになったんですか？」

「でも、ユリウスさん、僕がカララギで一旗あげるのが夢だったなんてよくご存知でしたねえ。やっぱり、そちらの情報収集力は恐ろしいですね...」

錆びついたように動きの鈍い唇を無理やりこじ開けて。

「彼...スバルは、単なる友人ですよ。私が、誰よりも敬意を抱く」

声は、震えてはいなかったらうか。

うまく笑えているだらうか。

彼女に、違和感を感じさせない『ユリウス・ユークリウス』で在れているだらうか。

彼女と出会った時の、彼が忌み嫌った『最優』の騎士で在れているだらうか。

彼の返答に、美しい銀髪の女性は戸惑った様に微笑み――

「ユリウスの、お友達？どうしてその人が...？」

ぎちりと、爪が掌に食い込んだ。

笑え、顔を歪めるな、口調を崩すなと必死で自分を叱咤した。

「貴女に助けられたのだと、そう言っていましたよ」

「私が、助けた？」

誰だらう、と考えたところで決して彼女の記憶に彼が蘇ることはない、ユリウスは誰よりも知っていた。

ユリウスを庇って暴食に「喰われて」死んだスバルを覚えているものなど、ユリウス以外にどこにもいないのだと。

※※※※※※※※※

あれは、プレアデス監視塔を目指す道中。  
まだ穏やかだった砂漠に入る前だった。

がたがたと、揺れる竜車を止めて一行は途中の街に降り立った。  
日はまだ高いが、次の街までは距離があるため今日はここで一晩を明かすのだと、そう決定して  
。

何となく、ユリウスは部屋から街中に繰り出した。  
街に入った時も気づいていたが、ここは街路樹が多い。  
街中にいながら、まるで森の中にでもいるような錯覚を抱かせる。  
森の中に街があるような、不思議な場所。  
ふと、彼は見慣れた背中に目を止めた。

「スバル」

振り向いたスバルは、ユリウスの顔を見て条件反射のように表情を歪めたが、気にせずに近寄る  
。

歪む顔が、ただのポーズだとこの頃にはとうに知っていたから。

ユリウス・ユークリウスを覚えているただ1人。

彼のそばにいただけで安心できるのだと、そう伝えたら彼の顔は何処まで険しくなるだろうか。言うつもりはないそんな想像を弄んで。

「君も————」

外に出ていたのかと、続けようとした言葉は。

「お兄ちゃんありがと————！！」

弾んだ高い声に掻き消された。

巡らせた視線の先。

大きな包みを抱えた少女が、青年の足にぐりぐりと頭を押し付けていた。

「こらこら」

困ったように笑った青年は、屈みこんで彼女の乱れた髪を梳いてやり。

「お誕生日おめでとう」

そう、何よりも大事な宝物を渡すように彼女に告げた。

その、微笑ましく幸せそのものの世界から、ユリウスは目が離せなかった。

「ヨシュアの、誕生日はいつだったのだろうか」

忘れてる間に過ぎてはいないだろうか。そんな事すら思い出せないと、呆然と呟いた彼に。

「知らねーよ、そんな事まで」

ため息まじりに、彼は言った。

「...ああ、分かっている。すまない」

ふらりと、踏み出した足は腕を掴まれて止まった。

「あのなあ、過ぎてたらその分一気に祝ってやりゃいいじゃねーか」

お貴族様らしく、盛大なパーティー開いて、好物いっぱい作って。

「あ、その時はちゃんと俺とレムとエミリアさんとベア子とオットー...はまあ良いか、とりあえず呼べよ！」

破産するほど食ってやるからと笑う彼が、ユリウスが存在を取り戻すことも、ヨシュアやレムを起こすことも当たり前のように決めているのだと思い知った。

あまりに、確定された未来のように告げた彼に。

何も言えずただ立ち尽くした。

そんなユリウスに、彼は仕方がないと言うように。

「お前は、俺の前でそんな顔すんじゃねえって言っただろうが」

大きく、息を吐いて。

「ほら、約束な」

するりと、彼は小指と小指を絡ませた。

「約束破ったら針千本飲ませるぞ」

今回はお前にしか義務は生じないから俺は飲む必要がないと、そんな事を言いながら。

彼は見たこともないほど、優しい顔で笑っていた。

「これ、レムが好きなやつだ...いつか連れてきてやろう」

「ガーフィールに、一回型ってやつをちゃんと教えて見ても面白いかもしれねえな...」

「オットーカララギに連れて行ってやらねえと...あいつ商人向いてないけど」

ざあざあと、耳障りなほどに雨が地面を叩く。

ユリウスの身を貫く筈だった刃は、スバルの腹に深々と埋まっていた。

満身創痍で、それでも彼に致命傷を負わせた暴食は驚いたように目を見開き―――そして。

「ああ、ゴチソウサマデシタッ！」

そう言い残して。満足そうに目を閉じた。

―――流れ込んでくる怒涛のような記憶。

大切な弟―――ヨシュア。

どうして忘れて入られたのか不思議なほどに鮮烈な記憶を無視してスバルの前に跪いた。

「スバル、なぜ―――！」

私を庇ったと、疑問は声にならなかった。

腹から流れ出す血は、一目で致命傷だと分かるほど。

すぐに治癒術師をと、身を翻そうとするユリウスの裾をスバルが引いた。

「待っているスバル、直ぐに」

「なあ、エミリアのこと、たのむ、な」

優しい子だからと。告げる彼の言葉を理解したくなかった。

それが遺言だと、彼はもう助からないのだと理解している自分が憎かった。

「な、にを」

「あと、他の奴、らも」

どいつもこいつもお人好しばっかだからと。

弱々しい声が告げていた。

「たのむ...ユリウス」

堪らず、泥の中に座り込んだ。

「ああ...君が、それを望むなら」

約束など、柔らかな笑顔を残して。

ナツキ・スバルは死んだ。

死体を抱えて、ユリウスはひたすら無言で足を進めた。  
自分を庇い死んだ彼。  
誰に何を言われようが、彼の仲間たちに刃を突きつけられようが。  
受け入れようと思っていた。  
まだ死ぬわけにはいかないが、拠点にはフェリスがいる。  
刺されても氷に貫かれても死ぬ事は出来ないだろうと。  
「あっ、ユリウスさん！」  
暴食を倒したんですねと駆けて来たのは商人の青年だった。  
「今みなさん記憶が戻って——」  
そして、ユリウスの腕の中で眠るスバルを見て。  
痛ましげに顔を歪め。  
「どなたですか？」  
そう、言ったのだ。

誰に会ってもスバルを覚えているものは居なかった。  
何よりも。  
「ユリウス！」  
銀の少女が、笑った。  
「みんな無事で、本当に良かった！」  
彼女の口から出る、彼への否定を聞きたくはなかった。

だから、彼の名を固く固く封じて。

彼を否定する彼らを見たくないから  
暴食の権能がどれだけのものか、忘れ忘れられたユリウスが誰よりも知って居たから

だから——

なぜユリウスだけが例外だったのかは分からない。

記憶に残る彼の言葉を実行し、その度走る胸の痛みに蓋をして。

彼の言葉を知るのが自分だけというかすかな満足感に縋って。

彼を独り占めできる事に、暗い愉悦を覚えなかったと言い切る事は出来なかった。

それがどれだけ、愚かで悍ましい感情か知って居ても————

それでも。

それでも。

生前決して手に入らなかった彼が、彼女たちを愛し愛されて居た彼が。

自分だけのものになったと、やっと、手に入れたのだと。

ユリウス以外に彼を知る人はもう居ない。

ユリウス・ユークリウスだけが、ナツキ・スバルを知っていた。

彼との約束／彼の遺言

あとがき

お読みいただきありがとうございます、リーエです

割と見切り発車で発進した企画が、こんなに素晴らしいものになるとは・・・

本当に、皆様のおかげです

今回、とても素敵なるく様の表紙を見て、一体スバルはどんな約束をしたのだろう、という事から想像を広げていきました。

思いもかけないところに着地した感もありますが...

ろく様の素敵すぎる表紙に、私の妄想力がぎゅんぎゅん刺激された結果です。

ろく様、本当に素晴らしい表紙をありがとうございました！

表紙・ろく様

文・リーエ



## VI.再会と、そして



web最新話のネタバレ含みます。  
ご注意ください。

薔薇だと、思った。

彼は真っ赤な薔薇に抱かれて眠るのだと。

久々に訪れたルグニカ王国の王都。その少しばかり古びて、しかし手入れはきちんとされているそこそこの宿の食堂で、オットー・スーウェンはその噂話を耳にした。

「なあ、聞いたか」

「なんでも、伯爵の屋敷に族が…」

「人質とられて逃げられたとか」

「面子丸つぶれだって激怒して、騎士団にも届けてないらしいが」

情報収集は商売の基本だ。儲け話に繋がりそうな話題、流行の兆し、噂話、そして危険が手招きしていそうな話。

事前に仕入れておくに越したことはないのだから。

長年一人旅し、磨き抜かれたオットーの鼻によれば、今食堂の端で交わされている情報——王城で高官の地位につき王都に居を構えるとある伯爵様の屋敷に族が押し入り、人質をとって逃げたが、プライドが高く敵の多い伯爵は面子がつぶれることや、弱みを晒すことになりかねないと騎士団に届けず、情報を握りつぶし私兵でその族を追っている、というそれは正に厄介ごとが諸手を上げて歓迎しているものに違いなかった。

まず第一に、本気で情報の隠蔽を図っているならこんな城下の食堂で聞こえよがしの声音で情報が流れているはずがない。

騎士団にとっくに話は流れ、伯爵が止めようがどうしようが調査は行われているはずだ。

つまり、話を交わす男たちは餌。獲物が掛かるのを待ち構えるための罠にしか思えない。

極力関わるまいと、件の貴族の名を頭に刻み込み少しばかり冷めてしまったスープに木匙を突っ込んだ。

「ああ、そういや、伯爵の屋敷に押し入った男、珍しい黒髪だったらしいぜ」

「え？」

だから、その話を聞いて声を漏らしてしまったのは不覚としか言いようがなかった。幸い、食堂の長机の端で食事をしていたオットーの側には誰もおらず、思わず上げた声は喧騒にかき消されて男たちにも、その他の誰の耳にも届いていなかったようではあったが。

——何を動揺してるんだ。

王都には珍しい黒髪の男。たったそれだけを聞いて動揺した自分が無様だった。

——あの人の訳がない。彼はメイザース領にいる。だいたい王都で他人の屋敷になんか押し入る立場の人じゃないんだから。

魔女教の魔の手からオットーを救い出してくれたナツキ・スバルという少年。何処にでもいるような、普通の人だった。好いた女の子の前で格好をつけようとして、慕ってくれる少女を助けようと必死になって。足りない力に歯噛みして、それでも諦めることも投げ出すこともしない、そんなただの普通の少年にしか、オットーには思えなかったのだけど。

どうやらそんな彼の見立ては大いに間違っていたらしい。噂話に曰く、大兎を討伐した、村を救った、剣聖を自らの陣営に迎えた、大罪司教を討ち取った。

いくつものいくつもの、歴史を動かす偉業を成した彼をただの少年と扱う人間はもはや何処にもいない。

剣聖、剣鬼、賢人。そんな歴史に名を刻む英雄たちと同じ場所にナツキ・スバルは立っている。王選の候補者としてその名を連ねるエミリア。忌まわしき銀髪のハーフエルフの彼女が公の場に出てくるなど、王になるなどあり得ない。そんな下馬評を覆すほどの活躍で。

今やナツキ・スバルが、そして剣聖すらもが王として押す彼女は列記とした王候補の1人として王国の住人に受け入れられている。勿論、ハーフエルフなど存在自体が受け入れ難いと、そんな彼女の見方をするなど魔女教徒より許し難いと陣営ごと忌避する者もいたが。それでもかつて彼女が姿を見せるだけで村人は息を潜めた、助けようと差し伸べた手さえ拒絶された。その頃から比べれば、現状がどれほどの奇跡か。

それをなすために、彼女の騎士と名乗る彼が一体どれほどまでに身を削ったのか。

ふと、思い浮かんだそんな事は関係ないとよく磨かれた長机を睨みつける。

なんでも1人で抱え込んで、無茶ばかりして。それでも結局一人きりで成し遂げてしまう彼には自分の助力は必要ない。そう言って離れたのはオットーの方なのだから。

もう、関係ないのだ。

気にする必要も、その資格すらも、あの日彼自身が投げ捨てたもの。

そう言い聞かせても、不思議とかの賊が黒髪だったという言葉はやけに耳に残った。

―――後から考えれば、きっとそれは予兆だったのだろう。

あの時もっとよく考えて警戒していれば。そうオットーは自分自身を罵倒することになる。

人が集まれば物が集まり、物が集まれば金が集まる。はるばる遠方から届いた異国の品、滅多に見ることのできない珍品。大国ルグニカの王都は様々な物と、それを求める人で満ちている。商売人はそんな彼らの欲望を見極め、あるいは買いあるいは売り、自らの身代を膨らませては痩せ細る。

オットーもそんな悲喜が交差する戦いに身を投じていた。

王都に居を構えるような商人は、どんな小さな店の主人でも生き馬の目を抜くような世界で生きてきた一端の揃い。僅かな息を吐くのすら惜しみ腹を探り合う。

そんないくつかの取引を終え、最終的にそこそこの利益を計上できたことほっと一息ついた彼の目線が、吸い寄せられるように一点に止まる。

人目をはばかるように伏せられた顔。気配を殺して歩く彼は路地裏にその身を滑り込ませた。

特徴的な黒髪がフードで覆い隠されていても。見えたのが人混みをかいくぐった一瞬でも。

それが誰かなんて、分かってしまった。

そして、彼の後を僅か離れて進む男達。

―――伯爵邸に賊が

―――珍しい黒髪

————秘密裏に探して

脳裏にこだまする朝方の会話。

まさかと思った可能性だった。

あり得ないはずの答えだった。

そして、オットーの予想があっていたとしても。

もう関係なんて何一つないはずの人だった。

彼がどんな理由でこそこそと人目を避けていても、誰に追われていようが。

この先、どんな目にあつたとしても。

借りも貸しも、全てを生産したオットーが知ったことではない。

彼は彼なりの必要にかられて行動を起こしているはずで、そこにオットーの関わる余地など全くないはずで。

そのはず、なのに。

————本当に、仕方のない人だ

どこかで聞き覚えのある声がある。

————いつだって無茶ばかりして

全くだ。

————目が離せないほど危なっかしくて

そう思っていたこともあった。

————悪ぶっているわりに詰めが甘くて

そう見えるだけだ。

————危なっかしくて目を離したくない

結局彼は最善を叩き出し続けた。

————空回りしてばかりで、つい手を伸ばしてしまいたくなる

1人で結果を出してしまえるナツキ・スバルには、オットーの助けなんて必要なかったじゃないか。

彼の手助けをする存在でありたい、なんて、所詮はオットー・スーウエンのただの独りよがりな願いだつたと、そう思い知らされたからこそ自分は彼らから離れたのではなかったか。

そう、分かっているはずなのに。

オットーの足は気付けばスバルの消えた路地裏へと踏み出していた。

路地裏をこそこそと進む彼を追う男達を追いかける、なんて字面からして怪しさと面倒ごとに繋がるの気配が伝わってくるようなことをしている自分に、一体何をしているのかと冷静な思考が問いかける。

今ならまだ間に合う。追いかける男達も、彼もまだオットーには気付いてすらいない。このまま踵を返し、表通りに戻ってしまえば何もなかった日常に戻ることができる。

掘り出し物がないか、商売のタネが転がっていないかと市場を巡っても良いし、今日の儲けを記念して、少しばかり早くから少しばかり良い酒を過ごしても良いだろう。

分かっている。

―――ちくしょう。

その冷静な判断に従わず、動き続ける足を罵倒した。

表通りの喧騒も聞こえなくなって久しい程に歩いた頃。

唐突に、彼は足を止めた。

人気のない薄暗い路地裏。

ばさりと、フードを落とす。

滅多に見ない黒髪が露わになった。

「あー、つかれた」

目立たないように歩くって結構体力使うんだな。

「あ...」

思わず、声が溢れた。

そんなことを言いながら振り向いた彼は、あまりにあの時のままだったから。

特に秀でたところも悪いところもないともすれば薄くなりがちな顔立ちの中、存在を主張する不機嫌そうに見える三白眼。

ハーフエルフの騎士と忌まれる悪人にも、幾度も多くの人を救い偉業を成した英雄にもとても見えない、ただの少年。

にと、浮かべた笑顔ひとつもあの時と同じもの。

多くの武勲。多くの経験。重ねたそれに対して反映される変化の無さに違和感を感じるほどに。

「出てこいよ」

びくり、と肩が震える。しかしスバルのその呼びかけはオットーに対してのものではなかった。

隠しに差し入れ取り出した紙の束をひらひらと揺らし、もう一度。

「出てこいって。これが目当てなんだろ」

途端、狭い路地裏に殺気が満ちた。

「おいおい、こんなか弱い俺相手にそんな苛立たれると怖くて手が震えて」

ひらひらと、ひらひらと、態とらしく紙束が揺れる。

「落っことしちまうかもしれないぞ」

じゃり、と靴が砂を噛む音が、カチリと金属が噛み合う音が、これ見よがしに響いた。

「おー怖い怖い」

ってことは、と彼は笑った。

「やっぱこっちが本命だったってことか」

やっぱあちはハズレだったか。今回は此処まで本気で追いかけてこなかったからな。戻っておいてよかったぜ。

やれやれと安堵の息を漏らす彼が、僅か眉を寄せる。

「煩い、分かってる」

そして。

「ほら、返してやるよ」

じわりじわりと、包囲網を狭める男達に無防備に手を差し伸べる。

僅か困惑したように、あるいは警戒するように男達の纏う空気が揺らいだ。

抜き身の白刃を構える、明らかに堅気とは程遠い男達に囲まれていながらこの余裕。

もしや、この一連の流れそのものが罠ではなかったかと。或いは誘い出され追い詰められているのは自分たちの方ではないかと。

彼らと、そしてオットーの脳裏によぎるのは1人の男。

主人に去られてエミリア陣営、延いては彼の配下に入った騎士。

この世で最強の存在、剣聖ラインハルト。

その名が存在そのものが強力無比な抑止力となり得る。

ぎょっと、オットーは目を見開いた。

明らかに殺気に迷いが出て、動きの鈍った男達にスバルはあろうことか自ら近寄ったのだ。

一体何を考えているのかと、息を呑み。

―――ちくしょう。

先ほどと同じ罵りを自分に向けて。

大きく、腕を振りかぶった。

魔力が膨れ上がり、轟音と衝撃が身体と鼓膜を揺らした。

離れていたオットーでさえそうなのだから、間近で食らったスバルと男達は或いは倒れ、或いは蹲り大なり小なりダメージを受けているようだった。

オットーが投げたのは、万が一の護身用にと携帯している小さな魔石。

「なっ」

「...っ！」

「おい、待てっ...！」

身動きの取れない男達の只中に突入し、へたりこんでいるスバルを引きずるように走り出す。

「おい、ちょ、お前オットー?!」

何してんだと、呆気にとられたような声すらあの時のまま。

「何してるんだなんてこっちのセリフですよ！何やってんですかあんた！」

つけられていることを分かっているこんな人気のない路地裏に入り込んで、自らを囷にして敵を誘い込んで。明らかに場慣れしている集団に取り囲まれても慌てず、挑発を繰り返しその白人に身を晒して。

「それとも何かの罠だったりしましたか!？」

あなたの作戦台無しにしたなら申し訳ありませんでした！」

思いは、したのだ。全てを理解しているようだった彼の様子に、これは彼を餌にして敵を一網打尽にするつもりなのではないかと。

かの剣聖。

彼なら一瞬でスバルの傍に駆けつけ、男達をなぎ倒すことなど鼻歌交じりにやってのけるだろう。

でも、それにしたって。殺気に塗れた場に身を置くスバルの様子はあまりに自然で。とても何かを企んでいるようには見えなかった。

だから、手が出てしまった。

彼が整えた全てを台無しにすることになるかもしれないと分かっている。

だってあのままなら、彼が切られる未来しかオットーには想像できなかったから。

オットーの予想なんて軽く超えていくのが彼だと理解はしていても。

それでも、彼が傷つけられると思えば手を出さずにはいられなかった。

「ところで、隠し球があるならそろそろ出してくださいませんか！」

大勢の足音が迫ってくる。

こちらは素人と単なる商人。追いつかれてしまえば末路は決まっていた。

用意した作戦があったなら今すぐ実行してほしい。

具体的には剣聖とか剣聖とか。

そんな事を考えていたからだろう。

「あー、いや、特に助かる作戦とかなかった」

その言葉を理解するのに一拍。

「は...？」

危うく、つんのめりかけてオットーは彼の顔をまじまじと見つめた。

「はっ、えっ、だって剣聖は...？」

「あいつにはエミリア達の守りを任せてる」

だから今この王都には居ないのだと。

「他に、手勢や衛兵が...」

真っ直ぐな褐色の目がバツの悪そうに細められた。

それだけで、分かってしまった。

———彼は正真正銘なんの保険も用意せず、あの場に立ったのだと。

咄嗟に、後ろ向きに魔石を放り投げた。

再びの轟音と衝撃。

先ほどよりも大きなそれを気に留めず、自身の加護を最大限に解放する。

「なになに」

「おおきいの」

「いっぱい」

「あっちあっち」

「あ、ふまれた」

「どこどこ」

世界が、声で満ちた。

地を這う虫がドブを駆け巡る鼠が空を飛ぶ鳥が。

あらゆる生き物の声が四方八方を取り囲む。

それはあまりに懐かしい地獄だった。

この雑多な音の洪水から取り出すべきは2点。

男達の位置と、逃げ道と。

驚いたように目を丸くする彼の手を引いて全速力で走り出した。

逃げて、隠れてまた逃げて。

一息つけたのは、打ち捨てられた廃屋に隠れてから。

ぜえぜえと音をならす息を落ち付けようと深い呼吸を繰り返すオットーの顔を見て。スバルは咄嗟に彼の肩を掴んだ。

「おい！大丈夫か？！」

不思議とその声は、言葉の洪水の中ですらすんなりと耳に届いた。

彼の意外と長く整った指が、オットーの鼻の下に触れた。

ぬるりと汗とは違う何かが彼の指を汚す。

————赤黒い血。

ああ、と納得した。言霊の加護を限界まで使い倒したらこうなるのかと。

頭の中はひどく冷静で。

少し休めと言い募る彼の手を取った。

「何を考えてるんです」

「はぁ？こっちのセリフだけ。良いからとっとと座って————」

「何の策も無く、人にも頼らないでこんな無茶をして」

あの時オットーが飛び出さなかったら、きっと彼は良くて拘束されて居た。

最悪。

「死ぬつもりだったんですか」

詰るために投げた言葉だったそれに。

ナツキ・スバルは思いもがけない事を言われたと言わんばかりの顔をした。

例えば。

商人に金が好きかと問えば。

歌姫に歌が好きかと問えば。

どこかの殺人鬼に腸が好きかと問えば。

きっと今の彼と同じ顔をする事だろう。

何を当たり前のことを聞いているんだと言わんばかりの顔を。

思っていることを読み取られたことを気付いたのだろう。

取り繕うように、オットーが口を開くより先に彼は苦く笑って見せた。

「当たり前だろ。俺みたいな何もないやつが何かをしようと思ったら死ぬ気でやるしか、」

「そんっ、」

そんな言葉が、取り繕うための表面だけを整えた綺麗な言葉が欲しかったわけじゃない。

だって彼のあの表情は死の覚悟ができてるなんてそんな次元じゃなかった。

まるで死ぬことが当然だと。歩いたり食ったり、そんな日常的な行為の一つだと。

そう言っているようにしか見えない。

何を言えば良いのだろうと、オットーは口を開けたまま彼の目を見つめる。

どんな言葉なら彼に届くだろうか。

例えばこれが他人の死を道具にするなら、最低だとそんな人じゃなかっただろうと罵れば良かった。

自分が失敗するはずがないと、そんな根拠のない自信に満ちた無鉄砲さなら自分の無力をわきまえろと告げれば良かった。

自分の死を単なる手段としか捉えて居ない人間に、一体何を言って良いのか。

オットー・スーウェンには分からなかった。

1人で何でも成し遂げるスバルにはオットーの助けなんていらないだろうと別れを告げた。

誰の手も借りまいと1人で足掻く彼は、そして何でも成し遂げてしまう彼は。オットーまで守ろうとしてしまうだろうからと彼の負担にならないために———そして一方通行の友情に虚しさを覚えて離れる道を選んだが。

白鯨の討伐、怠惰を打ち取り、試練を抜けて聖域を解放し大兎を殲滅。

細い細い、ほんの僅かの勝ち筋を拾って常人離れした戦果を計上してきた彼だったけど。

此処まで歪んでは居なかった。

此処まで人として外れては居なかった筈だ。

もしもあの時離れずにいれば、必要とされずとも彼の側で彼を支える道を選択していれば彼が此処まで壊れることはなかったのだろうか。

もしもなんてありえないと理解して居てもそう考えることはやめられなかった。

だってそれほどに今の彼のあり方はあまりに悲しくて醜悪で。

ナツキ・スバルのそばにいる、守られている彼らは一体何をしているのかと、離れて言った自分が言う資格はないと分かって居ても責めたくなくなってしまふ。

きょとんと、不思議そうに三白眼を見開くスバルはオットーが何に嘆いているかなんて知りもしないのだろう。

———今からでも間に合うだろうか。

何の手助けもできないオットーが彼のそばに居て、歪みきった彼に何かを返すことが出来るだろうか。

「ナツキさん」

「お、おう？」

オットーが何かを自分に告げようとしていると察したのだろう。

スバルは歪めて居た表情を引き締めた。

そんな彼に、オットーは———

「きたよ」

「きたきた」

「おおきいのいっぱい」

「すぐにいる」

「みつかったよ」

言おうとした言葉を飲み込んだ。

水を差された怒りが一瞬湧いてすぐに萎んだ。

こんな急場で考えたことを、その場の勢いで口にしたりしなくてむしろ救われたのかもしれない。

全ては、此処を切り抜けてから考えたら良い。

ゆっくり考えて、彼とも話して。

結論を出すのはそれからでも遅くはないのだから。

「ナツキさん、ここを切り抜けられたら話したいことが有ります」

「えっ、ちょ、それフラグ————！」

顔を引きつらせる彼に静かにと目配せをする。

「静かに、もうそこまで来ています」

話は後でと、告げるオットーに何とも言い難い視線を一つ。それから一瞬だけ下を向いて。次にオットーに向けた顔はいつものナツキ・スバルのものだった。

オットーは慎重に壁のひび割れから外を覗く。

「良いですか、今この辺の生き物達に逃げる経路を探ってもらってます。見つかり次第この建物ごと爆破して」

流石に単に魔石を投げるだけならもう通用しないだろう。だが建物ごと瓦礫に変えることで追っ手の一部なりとも巻き添えにできたら最高だ。混乱に乗じて逃げ出して、人数を減らすことが出来たら。一部ならば或いは金で動かすことが出来るかもしれない。

オットーの頭の中にいくつもの方策が組み上がっていく。

当然、言霊の加護もフル回転させている脳はとうに限界を超えている。

ガンガンとした痛みと朦朧とする意識にもう少しだけで良いからと唇を噛んだ。

風が吹けば倒壊しそうな廃屋の彼方此方に魔石を仕掛ける。

切り札の魔石は大盤振る舞い、心身ともに疲弊して、これから更に大損するかもしれない。このツケはきっとスバルから取立てよう。

自分から巻き込まれたことを故意に無視し、そう心に誓った。

————どこか沸き立つ心は見ないふりをして。

彼らの包囲網が完成するのと、逃げ道が見つかったのがほぼ同時。

「ナツキさん、合図をしたら」

走ってください。言うつもりだった言葉は出るタイミングを永遠に失った。

「悪かったな、オットー」

ぶしゃりと、耳障りな音がした。

生暖かい何かが、オットーの後頭部から背中を濡らしていく。廃屋に錆臭さが満ちた。

「え...」

振り返って。

花だと、思った。

赤黒い薔薇を抱いているのだと。

真っ赤な花びらが彼の腹を割いて地面に咲き乱れる。

「ナツキ、さ...」

「やれ、エルザ」

掠れた声が、誰かの名を紡いだ。

「仕方のないご主人様ね」

美しい女が立っていた。

「外、やつら...だ」

オットーには手を出すなと告げる彼を一瞥し、彼女は外へと身を躍らせる。

剣戟の音と悲鳴。

そんなものには注意一つ払わず、オットーは遂に膝を折った彼を抱きとめた。

「ナツキ、ナツキさん、何で?!」

何で彼が傷ついているのか、あの女は誰なのか、保険は用意していないと言っていたではないか。いくつもの何故が思考をふさいだ。

どろりと流れ続ける血が、その傷が致命傷だと物語る。

「ごめん、な」

巻き込んでごめんなんて、そんな言葉が欲しかったわけではなかった。

目の赤が前が滲む。

何でこんなに簡単に、どうしてあっさりと。

「つぎ、はもっと」

うまくやるから。

何を言われているか理解できなかった。

それが、ナツキ・スバルの最後の一言。

「あら？死んでしまったのね」

全身を血に染め、頬を艶やかに上気させたエルザがスバルを抱えるオットーの前に立った。

スバルの腹を割いた、彼を主人と呼んだ彼女。

「ど...て」

「ごめんなさい、聞こえなかったわ」

すっと膝を折って屈んだ彼女の泣きぼくろがやたら目に付いた。

「どうしてこの人を！」

怒りのままに喚き捨てる。彼女がオットーがとてもではないが勝ち目のない力量の持ち主だとか、そんなことはとうに頭になかった。

スバルの体を抱いていなければ掴みかかっていただろう。

「だって、それが依頼だったのだから。合図したらご主人様の腹を割いて、外の人たちを殺す

のが」

ひゅっと、喉が凍りついた。

ああ、そうだ。

彼は言っていたではないか。『助かるための作戦』なんて用意していないと。

「聞きたいことはそれだけかしら？私はまだ仕事が残っているのだけど」  
反応を返さないオットーが了承したと受け取ったのだろう彼女は、一瞥をスバルになげで、  
そして身を翻した。

ただただ、呆然と座り込むオットーを残して。

ぱちり、と目を開けるとそこには見覚えのある天井。

「エキドナ」

『君の推測に間違いはないよ。今日は王都に入って2日目の朝だ』

ズレが無いことに安堵の息を一つ。

前回の周回はオットーの乱入があったため予定が狂っていたから、セーブポイントの変更を少しばかり心配していたのだ。

「情報は集まった。今度はうまくやるさ。

...オットーには悪いことしたな」

今回は巻き込まないようにしないと。

前回までに得た情報を元に、今後の行動方針を立て直した。

「あんたが、スーウェンさんかい？」

「はい、何か御入用ですかね」

「実は少しばかり商談があるんだが――」

儲け話の匂いがする、とオットー・スーウェンは目を細める。

魔女の笑い声がどこかで響いて消えた。



あとかき

オットーが、可愛かったんです。

彼にこんな顔させるならどんな時かな～～ってところから妄想が広がり、気付けばこんなことに。

ドナ√で離れたオットーがスバルに会ったら。そして現√四章と同じく危機を共有したら。

それでもきっと、あのスバルにはオットーの想いは届かないのだろうな、と。

お萩様、素晴らしい表紙をありがとうございました。

表紙・お萩様

文・リーエ



## ご挨拶に代えて

---

はじめましての方もいつもお世話になっておりますの方もいらっしゃると思いますが、企画を主催させていただきましたりーえと申します。

まずは、お礼から言わせてください。

素敵な表紙絵を描いてくださった

お萩様、シズナ様、縁側様、なかこ様、ろく様、みかん茶漬様。

素晴らしい文章を書いてくださった

マリー様、望月様、おもちず様、なな様。

応援して下さった皆様。

読んでくださった皆様。

本当にありがとうございます。

皆様のおかげでこれほど素晴らしい企画になりました。

沢山の人の協力、アドバイスのおかげで電子書籍版まで仕上げられました。

私一人ならぜったに出来上がっていません。

重ねて、お礼を言わせていただきます。

そして次にお詫びを。

私の拙い運営で、参加者、読んでくださる方双方に非常に大きな負担をかけてしまいました。

偏に私の能力不足です。

本当に、ご迷惑、ご心配ばかりおかけいたしました。申し訳ございません。

この企画はもともと、リゼロアニメのあまりに素晴らしい出来栄えに感動した私が勢いのままに発信させたものです。

そこにたくさんの皆様のご賛同、ご協力でのこの度完成させることが出来ました。

本当に素晴らしい経験をさせていただきました。

いくらお礼を言っても言い足りません。

最後になりますが、こちらの作品ですがPixiv様の方で先行公開させていただいております。

ご興味おありの方はどうぞ、そちらも覗いてみてくださいませ。

<http://www.pixiv.net/novel/member.php?id=21507333>



腐：0から始めるアニメ最終回企画アンソロジー

<http://p.booklog.jp/book/113618>

著者：re0kikaku

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/re0kikaku/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/113618>

電子書籍プラットフォーム：パプー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社トゥ・ディファクト